

と、智恵子の目はけはしい。

「居ろと仰有つてももう此那お家には居ませんよ。」

「お冬つたら。」

と、エミヤはお冬に縋る、

「いゝからお嬢様、何にも仰有いますな、此那譯の分らない奥様に何を言つたつて通じはしないんですから。」

「何だねお冬、何が分らない奥様だね。」

「今出て行きますよ、本當に御嬢様、御察し申しますよ私でもゐなかつたら誰も御嬢様のお味方は無いんですから、どんなにかお辛いことがお有りだらうと思ふと、此儘御別れるのが残り惜しいやうですけれど、出て行くと仰有るのを強いて置いて下さい御願ひする程の弱い尻もありませんしね。」

「何時まで何を言つてるんだね。」

「今行きますよ、是でも物を片付けたら何かして、いくらか用もありますからね
ぢやお嬢さま。」

「お冬、歸るの。」

「致し方が御座いませんから。」

と、哀れに、悄然たるエミヤの寂しい顔、ハタと目を俯せて、疊の表へ走らせる。

二五 新 世 帯

「貴郎、お茶が入りましたよ。」

と、お葉は襖の外から聲をかけたが、夫の返事は聞えなかつた、再び呼んだが音も立てないので、襖をあけて中へ入ると、三郎は机に凭れ掛つてすやくと夢を結んでゐた、静かに寄り添うて肩に手をかけると、驚いたやうに目を睜つた。

「お茶を召し上らない。」

「何時だい。」

「十時、些渡すぎ。」

「全然寝つちやつたなア、どれお茶でも御馳走にならうかしら。」

茶の室には鐵瓶に松風の音、湯が沸つてゐた、長火鉢の向うへ、お葉が直したメ
リンスの座蒲團の上へ坐はつて、顔を見合せて嫣然笑つた。

「母さんはどうした？」

「今日はね、お鶴をつれて向島へ行つてらッしやるとか仰有つて、先程お出かけに
なりましたよ。」

「お鶴が可愛いんだね。」

「本當にね、どんなかと御案じ申してゐましたけれども、お鶴がお婆ちやおん婆ち
やんつてよく馴つきまますので、私のやうなものまで御機嫌が取りよう御座んすわ。」

「あんな人のいゝ阿母の面倒が見られないんだから、赤坂にも困つちまふね、僕ア

一體赤坂の姉は大嫌ひだ、厭に華族の娘ぶりやがつて、それでゐて何所かかう下品
な言葉使ひをする女でね。」

「妾は御目に掛つた事がありませんから存じませんけれども、阿母さまがよく仰有
いますわ、御自分に御子供がお有りなさらないし、エミちやんが被來つてから餘計
氣を揉んでらッしやるんでせう。」

「エミヤも可哀想だなア、折角、日本日本つて樂しみにして來たのに、あの嫂ちや
どんなに氣苦勞するんだか。」

「いつそ御兄さまに御話して當分此方へ御預りしたら如何？」

「さうすると此度はお前に妬かれるのが恐いからなア、はッは。」

「冗談ばかり言ふわ、そりや何にも知らない時は、變に氣は廻しましたけれども
今ちやちやんと分つてるんですもの、いくら私が馬鹿だつてまさかね。」

「然し兄貴の子だから思ふやうには行かないよ、それに當分つて言ふが、何時まで

が當分なんだか確固區別は付かないし、今更困るさ。」

「それでも阿兄様は可愛がつてらッしやるんでせう。」

「そりや勿論さ、兄貴の血を引いた娘つていへばエミヤだけなんだもの、其所等がやつぱり嫂の面白くない所かも知れないね。」

と、云つてる所へ玄關に訪ふ子女の聲が聞える、執次に出た新井と云ふ少年が、廊下へ突立つた儘、

「お冬さんつて方が御出でです。」

「お冬？ 知らないね、お前知つてるか。」

と、お葉を顧みた。

「赤坂のお宅からだと言つてます。」

「さうか、女中が何か使ひに来たんだらう、此所へ通して呉れ玉へ。」

「は。」

と、四角い聲、肩を張つて出て行つたが、入れ異ひにお冬が顔を見せた。

「ま、此方へ御入り、やア入來い。」

と、恭やしいお冬の挨拶に、少しあわて氣味に頭を下げて、

「赤坂でも變りは無いかい。」

「はい、誰方も。」

と、もぢもぢしてゐる、お葉は座蒲團をすゝめたり、お茶を汲んだり、如才なく立ち廻つてお冬を恐縮させて居る。

「何か用かな。」

「はい、實は私、お願があつて伺つたので御座いますが。」

「ウン、どんな用。」

「彼方の御嬢様のことで御座いますが、本當に彼方はお可哀想で御座います。」

恚ういふのを機會に、お冬は昨夜からの出來ごとを恰かも我事のやうに説いた。

『罪惡の結晶物にや相違ないが、何も當人の目の前で、雜種兒の、毛唐の言はなくもいゝちや無いか——唯相手が英國人だつたと云ふだけで、世間にや有り打のことなんだ、その意味から言へば僕らだつて餘り威張つたことも言へないんだからなア。』

『いえ、旦那、あちらの奥様だつて、そりや何だか變なことがあるんですよ。』
と、お冬はまた怪しい男の訪ねて來たことを語つた。

『へえ、そいつあ可笑い。』
と、三郎は笑つた。

『人の罪惡を批難したり、外聞が悪いの、家名がどうのと云ふ嫂に左右云ふことがあるのは可笑しい。』

『可笑しい所ぢやありませんよ貴郎、それこそ御兄様の恥ですわ。』

『さうするとだな、若し我々の想像が誤らないとすれば、兄は飛んだ食はせ物を背

負せられたんだな、冗談ぢやない——もつともあの人は娘の時代から評判がよくなかつたからな、或は事實かも知れない、ハテネ、兎に角是から様子を見ながら赤坂へ行かう。』

『左右して下すつたら何なにか、お嬢様も御喜びなさいませう、本當に叔父様御一人を力に爲つてらつしやるんですから、いつそお可哀想ですわ。』

『お前は……もし都合が出来るなら家にゐたら何だ、兄の所を暇を取つてすぐ當もあるまいから。』

『私のようなものでも使つて頂けますなら有り難いと思ひます。』

『丁度ようござんすわ、家でも一人女中を欲しいと思つた所ですから、その替り赤坂のお宅のやうに樂ではありませんよ。』

『いゝえ、もう骨身を厭ふことでは御座いませぬ、有り體に申しますと何しやうかと思つて心配しながら參りましたんです。』

「ちや丁度都合がい、お葉、洋服を出せ。」
 と、三郎は、早くも立ち上つた。
 洋服に着換えて玄關へ立つと、お葉もお冬も送つて出た、門際に生えてる椎の若葉に、水々しい日光がさしてゐた。

二六 踊りの師匠

門を出るとお葉があとから追うて来た。

「何だ、何か用か。」

「あの、先刻の話の六造つて男ね、彼は殊に寄つたら濱町の母さんとの六造かも知れませんか。」

「左様か。」

「小さい時から家を飛び出してね、本當に放蕩者で仕方がないんですよ、何所か華

族様の馬丁とかになつたつて、馬鹿に威張つてた事がありましたかね、そんな時の關係ぢや無いでせうか。」

「左様かも知れない。」

「先刻申上げやうと思つたんですけど、お冬の手前、つい言ひ損なひましてね。」
 「よし、分つたよ。」

「氣を付けて下さいよ、本當に貴方にもしもの事があつたらそれこそ大變だわ。」

「大丈夫、心配するな、何も喧嘩場へ飛び込むぢやあるまいし。」

「だつて貴郎は御自分で喧嘩を拵らへる方なんですもの。」

「お前とお鶴の可愛さには替えられないからね、はッは。」

「本當ですよ。」

* * * * *

濱町二丁目のとある路次、踊の師匠、芝吉が家の格子戸をあけて、勢よく飛び込んだ意気な男がある。

「阿母アゐるかい。」

丁度、二組ばかりの弟子を歸して、是から午飯の仕度に懸らうとする所、長火鉢に物憂さうな身體を凭せて、内弟子のお玉に口喧ましく何か呟けてゐた芝吉が、

「誰だい。」

と、長煙管をとつて、斜に構えて上り框をすかして見た。

「へへ、御免ない、俺だよ六造だよ。」

「へえ、六造——訊いたやうな名前だが、何所から來なすつたい。」

「此奴ア驚いたなア、芝吉が悴の六造たア私のことでげす。」

と、つかつかと立つて來て火鉢の前へ坐つたのを、流石に留めもしないで、

「芝吉の悴の六造なら、何所か遠國へ稼に行つて、二萬三萬と纏つた金を掴むまで

は歸れねえ義理だつたが、お前さんにそんな大金があらうとは思はれねえね。」

「厭味は言ひッこなしさ、たつた一人の母親ぢやねえか悴ぢやねえか、何も金をつかんで來ねえたつて、さう他人行儀にあしらはなくもいゝやね、おつと姐え、久しぶりだ一ぱい買つて呉んねえ。」

と、お玉を顧みて、五圓紙幣一枚投げ出すのを芝吉はあわてゝ拾つて、手に取つてためつすがめつ、

「偽造ぢやねえかい。」

「冗談いひッこなし、人聞きの悪い。」

「大分此の頃工面がいゝと見えるわ、阿母はまた何年振かのお前の顔だから、無けなしの財布を絞られるかと思つて、ビクビクしてゐたよ。」

「笑はせるせ、俺だつて何時まで母親に心配ばかりさせやしねえ、是で思ふ芽が出て見ねえ、踊の師匠なんか止めさせて、遊ばせ言葉の女中を付けてをかア。」

「何時見た夢だい。」

「はッは、とに角一ぱいつけねえな。」

芝吉はお玉に云ひ付けて酒肴の用意をさせてゐる所へ、例に依つてフロックコート
の竹田大造が、ぬつと髯面を出した。

「お出でなさいまし。」

「いゝかい、差支ないかい。」

「えゝ、構ひませんとも丁度一本つけた所でさあ、なアに、客人なもんですか、妻
の悴の六造つてえ放蕩者ですよ。」

「ちや御免蒙らう。」

と、上つて来た、三人一所になつて、食臺を圍んで盃の献酬を始めた。

「どうですえ、旦那、少しは目鼻が付きましたかね。」

「どうも駄目だ、馬鹿に強情でね、殺してくれ殺してくれとばかり云つてゐて、

流石に俺も手こずつたよ。」

「何なら、いつそ何處かへ賣りこかしたら何うですえ、此奴ア恚う見えても悪い方
へかけちや中々他にヒケを取るやうなドチちやありません。」

「じよ、冗談ちやねえせ阿母。」

「冗談ちやねえ本當だよ、阿母さんは偽は吐かない心得だよ。」

「あれだ。」

と、流石の六造も呆れた。

「だが、一體何ですかい。」

「色氣たつぶりつて癖に、悪事なんかしませんつて顔をしてゐるから呆れる。」

「まあ、勿論で言ひ争つた所で仕方がない、時に六造さんとやら、女を一人カツパ
ラツて来たんだがね、殺して終ふのもちよつと可哀想なり、何所か大連か朝鮮あた
りへ賣つ飛ばさうつてえんだが、心當りはないかね。」

「踏めますかい。」

「をいとくれよ六造、それや上も上の上玉さアね、お葉の本當の妹さ。」

「へえ、葉ちゃんの妹があつたのかね。」

と、感心して、

葉ちゃんの妹ならようがしよう、それで幾ら位になればいゝんですい。」

「値段は何うでも構はん、たゞ日本をオツパライさへすりあゝんだ。」

「ちや萬事はあつしが呑み込んだ、今晚にでも連れておいでなさない。」

「それより、お前が旦那所へ伺つたらいゝだらう。」

「さあね、ハータと、實アあつしも今晚はちよつと儲け筋があつて出かけなきあ成らねえんだが。」

「何だい、六造。」

「なアに、昔關係した去るお嬢様が立派な大家の奥様で濟しこんでるのさ、昨夜

不意と日比谷で見付けてね、今朝ちよつくら顔を出して恐喝かして置いて來たツて

え次第でね、へへ、阿母にも奢るせ。」

「お前にも女のあつた時があつたかねえ。」

「へへへ。」

と、六造は唯笑つてゐた。

二七 ケチな妻君

川村家の當主妙子が、上野公園で不意と行方が知れなくなつてから、もう四五日は経つたが未だにその手掛りの端緒さへも付かなかつた、警察は勿論、川村家でも出入の顧問辯護士竹田大造が主任となつて、心當りの方面はどんな微細な點までも搜索したが、何うしたものか皆目判明なかつた。

川村の本宅は麻布にあつたが今は誰も住んでゐない、向島の別荘に未亡人の富貴

子が娘のお妙と住んで、川を距てた橋場の別荘には外妾のお歌が、鹿子の光彌と一所に住んでゐた、お歌が竹田大造の妹分であることは世間には知られてゐなかつた。川村瀬平氏はこの春、娘の妙子を殘して世にない人の數に入つたのである、その父が死んでから、竹田の素振りに可笑いと思ふ所があつたが、妙子は若い娘の口に出して人には語らうともしなかつた。

浅草駒形町、電車街路の東側に竹田大造の事務所があつた、奥に住居にして、家付の夫人類子が子供三人を相手に暮してゐた、表二階の廣間が事務所、いつも若い書生が二三人ごろして居た。

「オイ、此の頃先生はちつとも歸らないやうだね。」

「川村の令嬢搜索のためだらう。」

「然し、まさか夜明けまで探してゐる譯でもあるまい。」

「はッは、探索を口實に何をしてゐるんだか分りやしない、誰だつてあの夫人ぢや飽

きが來らアね。」

「先生の外泊は大に同情に値するよ、僕アしみじみ左右思ふね。」

「尤もなア、何時御歸宅になつても満足な顔で出迎へた事がないんだからねえ。」

「満足な顔を要求するだけ無理だ、はッは。」

「はッは、異ひない。」

「然し、先生の外泊は同情に値するとしてもその餘波が我々に及ぶのはいさゝか筋ちがひの感があるね。」

「食物のことを云ふのは男子の最も卑しむべしとする所だが、全くその食物で生きてる以上豚の食ふやうな物ばかり並べられるんぢや、遣り切れないからなア。」

「それもさ、三杯目だと思ふと、岸さんにお湯をあげないかッて言アがるんだから失敬極まらア。」

「初めて米の見積をしやすまいし、何時も何時も足りなく焚きあがつて、仕方がな

いから是で耐忍してそばでも取れつてさ、そのそば代を誰が拂ふのだと言ひたくなる。」

「然し先生もケチだせ、我々のうち、誰が一圓と纏めた小使を貰つたことがあるか何時でも十錢二十錢、五十錢呉れりあ大奮發だつたちや無いか。」

「その癖馬鹿に忙がしいと來てるやがる、奥の用まで、都合によると餓鬼共の使まで命じやがるんだから厭になるね。」

「然し此の頃はみんな脇尾の奴がおせつかいをするから好都合さ。」

「牡鶏の尻から取り入らうつてえのさ、彼奴も出世は出来るせ。」

「今年もとう／＼花を見ずに終ふね。」

「ウン、家中一所に連れて行く行くで、とうとうおぢやんだつたね、行けない位なら黙つてりや、各々行つて來たんだがなア。」

「懐中が寂しいと、つい他も當にするやうになるさ、外ならぬ先生の言ふことだか

ら、當にするのが無理か。」

「もう晝飯になりさうなもんだね、一時になるせ。」

「何を待たせやアがるんだろ、その癖いつでも御馳走のあつたことはない、あれで手料理自慢で、御料理はポツチリの方が旨しいとさ、澤山食はれたら堪らないかなア。」

時に階段を上る音、ミシリ／＼と鳴る、三人の書生は急に言ひ合せたやうに口を噤んだ、上つて來たのは同年輩の二十一、やはり此家の書生である。

「やア脇尾君、盛装で何所へ出かけるね。」

「ウンちよつと其所まで、君らは御飯ださうだよ。」

「さうかい、旨くもない菜つ葉づくめだらうね、それでも喰はずにやゐられない、どれ行かうぢやないか。」

「脇尾君は濟んだのか。」

「僕は少し用があるのでお先へ頂戴して来たよ。」
「へへ、可笑しいな。」

三人は目を敬て、脇尾を見た、彼はニヤニヤ笑ひながら、鏡を見たり髪を梳つたりしてゐたが、やがて欣々と出て行つたのを、三人の中の塚田と云ふのが、是も好奇心が手傳つて脇尾のあとを尾行て出た、戶外へ出ると、その脇尾の前に何所か見た事のあるやうな洋服の男が歩いてゐる。

その洋服の男に氣取られぬようにして、脇尾はその癖注意を拂ひながら雷門の方へついて行く、塚田も脇尾に氣どられぬやうにそのあとに従つて歩つた、その内に一番先の洋服の男があとを振りかへつた、脇尾はわざとらしく向き直してとある煙草屋へ寄つて、いつもはバツトより外吸つた事はないのに珍らしく八千代を買つた、塚田は、ははあ是は夫人から幾らか貰つて先生のあとを尾行て来たかと察した洋服の男は竹田大造であつたのだ、三人は少時、同じ道を橋場の方へ、同じ位の間

ををきながら歩つてゐた。

二八 大福餅二皿

浅草橋場の、とある路次を入ると、竹田は急に立ち停つて前後を見廻したが、脇尾も塚田も目には入らなかつたらしい、すぐにそこにあつた立派な冠木門を入つて行つた、脇尾はツツと門に近寄つて、標札を見上げるとニヤリと笑つた、塚田は遙かにそれを眺めてゐたが何時まで経つても脇尾が根氣よく立つてゐるのに驚かされた。

腹が空つたので些渡街路へ出て汚らしい店に腰をかけて、大福餅を二皿喰ひながらその家が川村家の別宅であることを訊いて心に脇尾の迂闊さを笑つて、もう一度来て見ると、脇尾はまだ同じ所に立つてゐる、時計を見ると、もう小一時間も経つてゐる、此の位根氣がよくなければ女の氣には入らないのだと感じて、自分

もう好奇心も何にも放棄して歸つた。

歸途に公園へ廻つた、國から爲替が來たばかりで聊さか懷中に覺えあり、久振りで彼奴の顔を見て行かうかと思つたが、生蒲枕のまろび寢に一枚投げ出すのが急に惜しくなつて來て、電氣館へ入つて「百萬弗の秘密」を覗いた、富豪と悪漢、新聞記者や探偵の對抗策——場面々々の情調に全然興奮して終つた。

川村家の當主の娘の行方不明、數百萬の財産、といふやうな事が頭腦に浮ぶと妙に探偵的好奇心が動いて來た、そしてもう一度、橋場へ行つて見て、彼は啞然として呆れた、脇尾はまだそこに立つて、門と睨みつくらし居たのである、彼も負けない氣になつて根氣くらべを遣らうと思つた、そして更に夕飯を食つて腹を拵らへて來た。

五時六時、脇尾は依然として立つてゐる、門の中からはまだ誰も出て來た様子はないらしい、脇尾は竹田のあとをさへつけければいゝのだが、自分は更に新しい何も

のかを發見しなければならぬのだと、彼は興奮した頭腦の中へ活動寫眞的筋書を描いて見て一人で微笑して居た。

七時になると一輛の自動車は門内へ消えたが、誰が乗つて來たのか判明らなかつた、誰も乗つてはゐないやうにも思はれた、八時少し前になると、帽子を被らない妙な風の男がやつて來て、脇尾と門とを七分三分に睨みながら入つて行つたかと思ふと、中から竹田がヒョククリ出て來た、脇尾は慌て、顔を隠さうとしたがとうとう見付かつた。

「脇尾君ぢやないか。」

「へえ。」

と、ニヤニヤ笑つてゐる。

「へえぢや無いよ、今も門外に妙な男が立つてるッて云ふから出て見れば君だ、何だつて又そんな所にたつてるんだ。」

「へへ、私の勝手で。」

「君の勝手だらうが此方は迷惑するし、第一世間の目がうるさいから歸り給へ。」

「先生はお歸宅にはならないんですか、毎晩御歸宅にならないので奥様も坊ちゃんも心配してらつしやいますよ。」

「フフン。」

と、竹田は妙な顔をして脇尾を見た、そして何所か斯う安心したと云ふ風を見せ

て、
「君は家内に頼まれて俺のあとを尾行てゐるんだな、フフ、さうなら左右と初つか

らことはばいゝのに、餘計な心配もして吃驚すらアね。」
初ツからことはつたのでは尾行にならない、可笑しな事を言ふ男だと塚田は思つた、彼は竹田の事務所へ来てからまだ日が浅いので竹田の人物なぞよく判明つてゐない、川村の別宅で五時間も六時間も話しこんでゐるのをちと變にも考へた、聞け

ば外妻があるのだと云ふが話し込んでゐるとすれば妾のお歌が相手だ、そのお歌には男の子がある、本妻腹には此度行方不明になつた妙子一人しか無がつた——頭腦の中で種々のことを考へると、塚田は愈々面白くなつて來た、その内に脇尾がどう説きつけられたかノソソソと歸るらしいので見付からぬやうに物蔭へ姿を隠して遣り過した。

途端に彼の目の前に五五六の婆と、三十四五の男が現はれた、芝吉と六造である。

「儲け口は何したんだい。」

「何も全然不可え、五時の約束なのでノソソソ出掛けて行くとよ、貴様は何だ、何の用があつて何所から來たつてえ挨拶よ、面食つちやつたね。」

「向ふの女がかい。」

「何よ、生體の知れねえ書生見たいな男さ、貴様のような奴は奥へ取次ぐことは出

「来ねえッてさ。」

「それでハイサヨナラで歸つて来たんかい、お前も餘程どちだね。」

「所がよ、尻を捲くつて玄關先へ坐り込むなア知つてゐたが、四十五六の女中らしい奴が、目がほで知らせて何にも言ふなッて、そのさ歸り際に門の所で俟つてゐて委しい様子は茲で話しちやゐられねえから明日の今頃芝の山内へ來いッてえんだ、何だか、旦那の弟野郎で恐ろしくワケの分らねえ男が來てゐて、女と話し込んでゐて離さねえから……と云ふんだ。」

「おつと、危なく行き過ぎる所だつた、竹田の旦那が俵ちかねてゐるだらう。」

「左右だ、此方の玉を大連あたりへ賣りこかしや、少くとも五百兩にやなる、へッ今年しや南瓜の當り年つてなことを云つてな。」

「その心得で確固おやりよ。」

と、二人も門の中へ消えた、夜に入つては人通りも少ない橋場の町、家々は戸をこ

そ卸さね静まり返つて夜中のやうな寂しさ、軒燈ばかりが明い灯彩をちら／＼させて、大川の瀬の音が簾々と鳴つて居る、川村の別邸は植込の木立の闇深く閉ぢ籠めて、時々夜鳥の羽叩きが静寂を破つて聞える——塚田の好奇心が少々覺めかけて來た時に、門の中から自動車が出て來た。

二九 殺して下さい

見すかす遠海は、宵闇の霧深く立ち罩めて、漁り火のちらほらと瞬くのも物寂しい、風は静かに、波も咽ぶかとはかりの聲に哀愁をふくんで窓の下まで、ヒタリヒタリと打ち寄せて來る——此所を何所と知る由もない物置のやうな一室に、川村妙子は幽閉されて居た。灯影は勿論ない、晝も鼠が頭上を飛び廻る程に眞闇な、切なさ辛さに堪え兼ねて聲をあげれば、それは波の音にまぎれて何所にも通せず、語尾はわれと自からの胸に喰ひ入つて果敢なくも消えるかと思はれる寂しさ。

窓とは言へど、太い丸太を立て連ねて、僅かに光線を取るに遊ぎない方三尺、入口の戸は三度々々の食事を入れる外にはしつかりと立て切つて、押せども突けども音もしない……身を逃るべき便宜もない、舌噛み切つて死なうとは思ふが、川村家にまつはる餘多の暗い雲が氣になつて、むざと生命は捨てたくは無い、かくして過した五日五夜は長かつた。

さつと灯影がさして、入口の戸が開いた。

「何うですね、考へ直しましたか。」

と、ぬつと顔を出した男がある。

「……………」

聲は出なかつた、口惜しさに齒がギリギリと鳴つた、波が窓の下をピシヤピシヤと打つて、音に泣くかとはかり物寂しい。

「然し、いゝ加減に諦めた方がようがすよ、私も妙子さんを憐うして誘拐したこと

が世間へ分れば、其儘ぢや濟まないんだから遅かれ早かれ貴女は世に亡い者にしてその暴露を防がねばならん。」

「殺して下さい。」

「殺すのは譯は無いが、私自身で手は下したくないからね。」

「手を下すも同じです、私は五日五晩飲まず食はずです、御飯はみんな海へ捨て、終ひました。」

「それは貴女の勝手だ。」

と、冷やかに、

「けれどもですね、茲に貴女もよければ光彌もいゝと云ふ方法があるんですから、貴女さへそれを承知して下されば何も無理に殺すの何のと云ふ譯では無い。」

「光彌は誰の子です。」

「それを知つてるのは貴女ばかりです、ですから貴女に御願ひするんです。」

「私は知りません。」

「知らないとは言はさない、光彌の素性を貴女が知つてゐればこそ亡なれた川村さんが財産も……」

「分けないと仰有るのですか、橋場の別荘とあの邊の家作と其他に相當の財産が分けてあるではありませんか。」

「三千万圓に較べたら九牛の一毛です。」

「それは仕方がありませんと思ひます。」

「然しね妙子さん、何にもむつかしいことでは無い、貴女がウンと言ひさへすれば阿母様も御承諾下さるし、光彌もよし、四方八方圓くなるんぢやありませんか。」

「光彌は誰の子です、亡父に少しの血も引いてない光彌に彼丈の財産をわけたのは寧ろ私の好意からです、それ以上を私に強いやうとするのは無理です。」

「無理だから御願もするんです。」

「私には無理を通すだけの力はありません、人間は分相當の所で諦らめた方が結局幸福です。」

「何をッ。」

と、言つたが氣を變えて、

「然し結局は同じぢやありませんか、貴女は茲にゐて自由は利かないし、其の間に我家の方を旨く遣つて終へば、光彌は川村家の當主で數千萬の財産の主人になれるんですよ。」

「勝手におやりなさい、私の口からは承諾は出来ませんから。」

「貴女がいよ／＼居ないものと決れば是が非でも、川村家の財産は光彌の手へ廻つて來ますよ。」

「左右なるものなら仕方がありませんわ。」

「だから………同じことぢやありませんか、一言承知して下さればそれで済むんぢ

や有りませんか。」

「不義の子に財産を譲ることは出来ません、断じて、私の口からは断じて承知は出来ません、たとへ此の儘殺されても、條理の立たない事には承知は致されませんよ。」

と、言ひ切つて窓越しに暗い海を見る、潮や満ち来るらむ、波の音は高く切々と打つてゐた。

「ぢや何うしても承知は出来ないんですね。」

「仰有るまでもありません。」

「よし、それぢや此方にも考へがある、痛い目に逢はせるのが氣の毒だつたり可哀想だつたから温順しく口をきいてゐたのだ。」

「恁那所へ連れて来て、それで氣の毒だの、可哀想だのと貴郎にも情けどころがあつたんですか。」

「何とでも仰有やい、殺すも生すも、恁うなりや私の手の内にある、左様いふ口の利かれるのも僅かの間です、もう一二時間の後には貴女は海の藻屑と消えるか、刀の錆となつて終ふか。」

鬚の中に目が光つた、妙子は今更のやうに慄然として身を顫はした。

「私を殺すのですか。」

「さあ、殺した所で仕方がないから、満州か朝鮮あたりの料理店へでも賣つ飛ばしませうかね。」

「えッ、殺して下さい。」

「はッは、もう少し苦しい思をした方がいゝでせう、一思に殺して終つては樂しみが薄いと云ふものだ。」

「ええッ、悪魔！」

「はッは、何とでも言ふがいゝ。」

「ああ、阿母様はどんなに案じてらッしやるだらう、阿母様阿母様。」

「別に案じてもゐないようですせ、お妙も男でも拵らへて逃げたんだらうが、氣の利かない、左右と打ち明けりや一所にしてやるのになんてね、吞氣ですよ。」

「えイツ、偽ばつかり。」

「本當ですとも。」

と、急に踵を返して、

「オイ六造、準備は出来たかい。」

「へイ、全然とね。」

「よし〜。」

とぬつと入つて来た男の耳に口を寄せて何やらヒッヒッ、妙子は黙つて薄暗い室の内を眺めて居たが、その内に二人連立つて出た。

波の音ばかりが高い、人家續きと見えて、時々人の聲もするが、すぐに波にまぎ

れて聞き取る可くも無い——救助を求めやうとすれば又しても波、襲々として高く鳴る、狂氣のやうになつて室内を駆けめぐつたが、あゝ、身を逃るべき所は見出せない、唯、窓のあなたに遠海のいさり火、

絶望と落膽のために涙も枯れた、枯木のように身體を床の上に投げ出して、迫り来る果敢ない運命の手を俟つてゐるのは、誠に堪えやらぬ苦痛である、又しても起き上つて、そこはかとなく、もしや少しの隙でもあればと頼ない萬一を望みにかけて探し廻つたが、誠に蟻の這ひ出る穴も見えない、思案に餘つて又そこへ突伏した耳許へ、フト人の聲、妙子は起き直つて闇中を探るような眸を凝らしながら、覺悟を定めて運命の終焉を俟つてゐた。

三〇 海の朧夜

文學士根本哲士は、新佃島の海水館の樓上でその著作に耽つてゐた、彼が終生の

事業として企畫した劇壇の新興運動が、資金の都合で思はしく捗どらなかつたので、静かに時運の到来を待たうと云ふつもり、横山黒頭巾は茲で「大將東郷」を書いた、島崎藤村先生は「春」の思出を波枕から得て一代の名聲を博した、小山内薫さんや吉井勇君などが、或は劇作に、あるひは歌の構想に、筆には由縁の多い家である。東京灣頭、よせては返す潮の音が涼しい風を吹き送つて、静かに夢のやうな響を聞かせる二階六疊の一角に、彼は机に對して小説の原稿をかいてゐた、十時か十一時頃目を覺して、飯を食うと淺草へ行つて活動寫眞の群衆の中へ入る、六時か七時灯もし頃に歸つて来て机に向つて夜を徹する、下宿人の中で、彼は變り物で通つてゐた、今日もそれである、本屋に約束した際物の實説物を四五日中に書き上げねばならなかつたので、夕方の七時頃に歸るとすぐに筆は取つたがどうも思ふやうに筆が動かない。

長く延びた頭髪をかきむしり乍ら、机の前へ横になつて天井を眺めてゐると、案

内も無く上つて来た、角帽を手にして、制服の上に護謨のレーンコートを着てゐる。

「兄さんゐるかい。」

「ああ、よく来たね。」

と、起き上る。

「モーターボー、寝らないかい。」

入つて来た角帽は短刀直入、坐りもしないで言つた。

「乗つてもいい。」

「ちや今すぐに來ないか。」

「馬鹿に氣が早いんだね、まあお茶でも飲んで行けよ。」

「左右してはゐられ無い、海につないであるんだ。」

「へえ。」

と、感心したやうな顔をして見た。

「着換える手間位待てるんだらう。」

と、言ひながら帯を解き始めた。

黙して頷いたが、其處にあつたダルハムの袋を取りあげて、

「へえ、エライものを吸つてるなア。」

「その方が高いやうでゐて経済的だぜ、もう五六日持つからね。」

と、言ひながら着物と着換えてしまつた、一服點けて一緒に出かけた。

狭霧の立ち罩めるうす暗い夜の海を、怪鳥のやうな叫びをあげて、二人の乗つた

モーターボートが、波を蹴立て、走り狂つてゐたが、やがて月島の海岸の、とある

杭の邊でくるくると一とまわり、波に渦を巻かせると、ピタリと廻轉をとめた。

「何うしたんだ。」

「なアに、一休みして行かう、どうだい兄さん、モーターボートの乗り心地は。」

「悪くないね。」

「夏だといふんだがな。」

「月が出るともつといふだらう。」

「先刻の煙草を貰はうかな。」

「ウン。」

と、二人が無心にダルハムを捲いてゐると何處からとも無く、咽せぶやうな女の泣き聲が聞えた、火を點けて、旨さうに煙を吐くと此度は、闇をつんざく悲鳴がした。

「何だらう、變な聲がするせ。」

二人は煙草を捨て、耳を傾けた。

が、それツきり、咽ぶやうな泣く音も聞えなくなつた、悲しげな叫び聲もしなかつた、潮が、高く鳴つて舷頭を打つた。

「何だらう、可笑しいな。」

「なアに、兄さんの氣のせいだよ、小説家などは神経過敏になつてゐるから、よく人の耳にしないものを聞いたり、人の目に見られないものを描いたりするもんだ。」

「左右かねえ、然しその直覺が、場合はちがふが決して事實を誤らない事が多いよ。」

「ちや、何故俺が夜、不意にモーターボートで兄さんを訪問したか想像がつくかい。」

「其那ことが分るもんか、然し何うしたんだ。」

と、云つたが強いて聞かうとするでも無かつた、思索深い目を海上に走らせて、不思議な聲のあとを追うてゐる、彼の弟は工科大學の機械科の學生で、此の頃屢々實地研究の爲めある大工場へ出入してゐるが、今日はシンの主任から使用の許可を受けて、楽しみは共にといふ考へから兄を誘つたのだと説明したが、彼は唯フンフン

いつて聞いているばかりだつた。

「歸らうか。」

「ウン、歸らう。」

夜霧の奥に星の影が淡かつた、月も上るか、東の空がほのぼのと明るく、薄して行く黒い雲と雲との間に一脈の白い光が見えた、灯が目の上に紅くあちこち瞬たく夜の都の街は、さながら大きな古城を仰ぐかに眺められた。

「何だか投身でもありさうな晩だ。」

「オウつ、寒いね、朧月夜に美人の投身つてな事を言つて、明日の新聞記事に出るんだね。」

「故人圓朝だと、月島岸頭紅涙雨、微風散花朧月夜つてなことに成る。」

「今の新聞だと、花の散る頃と二號活字で題して、そばに小標題、月島に美人の投身と出るんだね。」

「活動寫真だと新派大悲劇、月島の夜嵐だ。」

「ハッハ、何だかもう投身でもあつたやうだね、さあ歸るとしやうか。」

自働艇は杭を離れて、又一と頻りくるくると廻轉して、やがて、月も上つた夜空の下を、水の面に金波銀波を揺り動して疾風の如く走つたが、間もなく海水館の近くで停つた。

「オイ有り難う。」

「何有。」

と、弟は舟を繋いだ、根本がひらりと岸へ上ると、急いで駈けて來たらしい一人の男にぶつつかつた。

「やア、失敬々々。」

「否、どうしまして、私こそ。」

と、向ふの男は眸を定めて根本を見たが、

「あ、根本先生ぢやありませんか。」

「あゝ君か、塚田君か、何だつて今時分此處等をブラ／＼してるんだ。」

「實はね。」

と、塚田は聲を潜めて竹田のあとを追つた事から、自働車を自轉車で追ひかけて漸々の思で月島まで來て、海岸のとある家へ入つた迄はつきとめたが、其のあとを何うすることも出來ないので、此の儘歸らうかと思つた處だと語つた。

「兄さん左様なら。」

と、モーターボートの中では彼の弟が怒鳴つた、根本は慌しく振り返つて。

「少し待つて呉れ、用があるんだ、もう一度ボートに乗せて貰ふかも知れないから。」

「左右かい、ぢや待つてる。」

塚田から話をきいて、根本は再びモーターボートに乗つた。

「何だい、今の男は。」

「俺の演劇の役者の一人なんだがね、例の通りの理由なんで當分ある辯護士の家に書生をしてゐるんだが……先刻の泣き聲ね、何だか氣のせいばかりぢや無いらしいよ。」

「へえ、左様かね。」

「もう一邊今ん處へ行つて見やう、陸から塚田が合圖をする譯だ。」

「何だい、一體。」

根本は塚田から訊いた話に自分の想像をも加へて、近頃死んだ富豪川村の娘の妙子が行方が知れないこと、辯護士の竹田が怪しげなこと、外妻のお歌に庶子があることもしや、竹田とお歌と謀つて、妙子をない者にして川村家の財産を横領しやうとするのではないかと思ふ旨を手早く物語つた。

「面白いなア。」

と、若い大學生は手を打つて躍上りつた。

「とうとう活動寫真中の人物になつちまつた。」

「とに角今の處へつけて呉れ。」

三一 怪しの火

何の關係も無い人達が恚うして自分の救助のために心配してゐて呉れやうとは、妙子の夢にも思ひかけぬ事であつた。

月が、窓からさし込んで、暗い物置きが仄かに明るくなつて來た時に、どやどや人の足音、罵しりわめくものものしい聲を訊いて、もう生命は今宵を限りに無いものと覺悟をきめて、端然として坐つてゐた。

「どうです、妙子さん。」

鬚むじやな、犍猛な顔に目がざろりと光つた、出入の辯護士、竹田大造が恩を仇

なる振舞も、今はむしろ可笑かつた。

「何時まで恚うして置いても御氣の毒ですから、今夜は外へ出してあげますよ。」
と、ニタリと笑つて近寄つた、其の手をとつて曳き立てやうとするのである。

「エイッ、何をしますか。」

「何にもしません、此の物置を出してあげるんです。」

「出して何するんです。」

「さあね、土葬にするか水葬にするか、私には分らない。」

「え、？」

と、壁ぎわへ身をよせて、力の無い目を睜つた。

「私は知らないが、オイ。」

と、後背を顧みて、

「六造、貴様は何うするつもりだ。」

「へへ、初物を食へば七十五日生き延びるとやら、連れて歸つて宿の妻とでもしませうかい、人間一人殺すのはこれで中々大體のことぢや無え。」
と、六造が妙に目を光らした。

「お前達はまあ、本當に情ない人だね。」

「竹田の旦那が殺せつていふのを、助けてやらうといふんだから餘程情はあるつもりですがね、へへ。」

「え、訊きたくも無い、殺して下さい。」

「望みとあれば、何れその通りにしてあげやせうかね……へえ、成る程、全くこりや葉ちやん生き寫した、肉身の姉妹つてえものは争はれないもんだ。」

「えッ、何ですつて？」

「六造は、下らないことを言はないで、早く働うとも處分しろ、萬事は貴様に任せ、焼いて食ふなと煮て食ふなと、但しは抱いて寝やうとも文句は言はないが、な

るべくならば日本を離れた方がい、せ。」

「わつちの知己が大連で可成大きな藝妓屋を出してますがね、そこへでも箝めやしやうか。」

「いゝから、お前の氣儘さ。」

「ちや、旦那、些渡手を賃してお呉んなせえまし。」

有無を言はせず猿轡を篋め、後手に縛りあげて戸外へ出した、月島の夜は寂しく更けて行つた、二十日ばかりの月の影、ぼつと暈を被つたやうに朧ろなのも果敢なかつた、海原を渡る風に木々の梢に若葉青葉のさゝら鳴りも冷たい、妙子は力なく彼等に引き立てられて、庭を歩んで竹垣越しに、芝折戸をあけて出ると堤防、堤防の下には底も分らぬ深さを見せて寄せ来る波の面は暗く沈んでゐた。

一隻のボートがつかないであつた、ボートへ梯子をかけて六造がまづ降りた、續いて竹田が、妙子を先に無理やりに、その階子に足をかけた時に、不思議や陸上に一團の怪火！ 明るく花やかに末を廣く四方を照らすと、何か知らず、その怪火を目掛けて走つて来る怪しい物音、堤防の曲り目から突然轟つと凄じい響きと共に紅い火影がさつとさして、竹田を上へ、六造を船に、妙子を階子に、三人の姿を鮮やかに照らし出した、くるくると渦巻烈しく廻轉して、飛鳥の如くボートの中腹に突かゝつて来た。

「あッ。」

と、六造は恐怖に顫える聲をあげて轉倒つたと見る間もなく、綱を絶たれたボートは其所に堪らずサカサになつて水の上を漂ようた、妙子は梯子を踏み外して是も波に水烟を白く立たせて落ちた。

竹田は堤上に危ふく足を踏みしめた、その階子を投げ捨て、先づ事なきを得た、悖と一息して海の面を見下すと、一隻のモーターボートに二人の男の影、波間に浮沈みしてゐた妙子を救ひあげて、くるくると又一と廻轉すると波を蹴立て、何所

ともなく消えた。

水に溺れた六造の悲痛な叫びばかりが、岸に打ちよする潮の音にまじつて、ほのかに明るい海の面にざわついて居た。

「六造々々、オイ何所だ。」

物は言はれず、木の葉のやうに漂ようボードの底に、漸やくにしてかぢり付いてぶる／＼と身をふるはせた。

「旦那え、階子を。」

と、云ふのも塞さうな、ガタ／＼齒の根も合はぬらしく、聲もはつきり聞えない。

「何だ、階子だ、ホラシヨツ。」

「へい、どうも有りがと。」

と、言ひながら、船腹へかけた階子に縋つて、辛うじて堤防へよち上つた。

「旦那、一體どうしたんです。」

「何した所ぢやねえ、恚うなりや俺はもう夜逃げでもしなけりや追付かない。」

竹田は地團太踏んで怒號した、その嚴めしい虎鬚も逆立つかとはかりに、目をむ

いて肩を張つたが仕方のない者は仕方が無かつた、それを嗤笑ふかのやうに、又しても一としきり潮がドドツと寄せて來た。

「一體今のは何ですな。」

「それを俺が知るもんかい、知つてる位なら恚那ドヂを踏むもんかい。」

「へへ、御尤も様でげす、私も五百圓の玉がかたなした。」

「五百兩や千兩ぢや替られない、俺の社會に對する立場が、まるつきり失なつたんだ。」

竹田はやけに鬚を引ばつた。

三三 娘 ごとろ

それから四五日経つた日の午ごろ、新佃島の海水館の前で車を降りた若い娘があつた、病氣あがりらしく、顔にいさゝか惱みのあるのが、却つて艶に美しい、淡紅色のバラソルを傾けて自から案内を請うた、聲に應じて現はれた女中が目を敬て用をきいた。

「根本さんは被在いますか。」

「あの、まだ御寝ていらしやいますが、御起し申しませう。」

「まあ。」

と、娘はかすかに頬に笑ひの影を湛えて、

「折角御寝つていらしやるのを御氣の毒ですから、御待ち申しませう。」

「いえ貴女、何時でももう御自覺めになる時刻で御座いますの。」

「何時でも？」

と、ちよつと目を瞬つて、

「こんなに遅くまで御休みなんですか。」

「え、ほほ、少々御待ち下さいまし。」

と、いつて、バタ／＼と奥へ行つたが、やがて間もなく引き返して来て、

「もう御目覺めになりましたわ、さあ何うぞ此方へ。」

導かれて通る、二階へ上つて曲つた一室、波の音が夢のやうに廊下に通つて、突き當つて消える、半ば開いた襖の外から、つゝましやかな半身を見せて手をついた。

室の主人、根本哲士はネルの單衣に白い浴衣を重ねた寝衣に、大島の羽織を引掛けて、無造作に振り向いた。

「御入んなさい。」

「御免下さいまし。」

するくすとすべる青曇み、上氣した頬を風が心地よく打つて、みだれかゝる後れ毛を拂ひもやらず膝を正して、

「先夜はいろくくと御世話様になりました。」

と、あとは口の内、根本は磊落に、

「僅かばかりのことで恐れ入りますね、それでわざわざ被來つて下さつたんですか。」

「はい。」

と、打ち仰ぐ眼清しく、艶めかしい匂ひが和らかい風につれて室の内をめぐり、いとうたたり、とうたたりとさながら、樂の音のとうに海鳴りがする。

「とうに伺はなければならなかつたんですけれども、身體がハッキリしませんでしたものですから、つい失禮ばかりしました。」

「はは、何の、わざわざ被來らなくもいゝんですよ、然しまあ、貴女も御無事なり御家も安全なり、結構でした。」

「みんな貴方様の御かげで御座います。」

と、袖を膝の上でなぶる、女中がお茶を運んで來たのを、根本は自から無格好につきながら、わざとらしく、

「さうするとまあ命の親つてな譯ですね、ははア。」

「え、そりやもう本當に……母とも左様申してよく御噂さして居ります。」

「道理で、此の頃よくクサメをしますよ。」

と、言つてケロリ、ダルハムを出して器用に捲く、其の手許を凝と見つめて居る娘の眸が、ひよいと根本の顔に飛ぶ、根本がひよいと見ると、慌て、疊に俯せた目の忙しなさ、襟足から耳朶のあたりまで紅くなつて居る。

娘は勿論、川村の妙子で、先夜危急な場合を救はれた再生の恩を謝すべく、今日

しも根本を訪ねたのである……流石に用がなかつたら歸つて呉れとも言はれないで、根本は氣まづい沈黙の顔を突き合せて、頻りと煙草の煙を吹いてゐた。

『此の頃は有り難う。』

不意に根本は恚う言つた、妙子を助けた翌日、自分と弟と塚田の三人へ當てゝ立派な禮物が届いてゐたのを思ひ出したのである。

『いえ、御目に掛るやうな品物では御座いませんで御恥かしう存じます、それに私が参らなければならなかつたのですが、生憎身體が……』

『あんな事をして戴いて恐りました次第ですが、然し折角の御好意ですから御預りしといて、それ〴〵他の者へもやりましたよ。』

『あの、他の方の處へも伺はなくつてはなら無いんですが、御所が分りませうか。』
妙子は、それが今日根本を訪ねた用向のやうに言つた。

『何有、可いですよ、一人は私の弟ですし、一人は私の弟子のような男なんです』

から、御心配には及びませんよ、御心持ちは申し傳えませう。』

『ですけれども、それでは私の氣が済みませんから。』

『みんな豚小屋のやうな處に生活してますからね、貴女なぞに行かれるとみんな恐縮しますよ。』

根本は煙草を吸ひながら、微笑を湛えて妙子の様子を眺めて言つた。
『そんな事は御座いませんわ、尤も御勉強の御邪魔を致しますのは何ですけれども。』

『左右々々、勉強の妨げになりますからね、被來らん方がいゝでせう。』

取り付く穂も無くなつて、妙子はやがて海水館を辭した、其のあとから、例に依つて例の如く、瓢然として、ダルハムを口にくはえながら戸外へ出た。

『根本さん、御樂しみ。』

女中が追ひ駆けるやうな聲で言つたのを聞き流して、海から吹き上る風を肩でくだいてスタスタと歩き出すと、行李を手にさげてエンチラエンチラ言ひながら、一人の青年がやつて来た。

「あ、先生、御出かけですか。」

「塚田君か、何だ。」

「實は、僕、竹田の所を出つちまつたんですがね。」

「左様か、ぢや當分俺ん處へ来てゐるさ、早く行李を置いて来いよ、淺草へ行かう。」

「へえ。」

と、餘り合點が早過ぎるので塚田は呆れて終つて、暫らくは言葉も出なかつた。

「然し、決して先生に御迷惑はかけません。」

「いゝから早く置いて来玉へ、俺は面倒くさいから此處で待つてる。」

「ぢや些渡をいて来ませう。」

と、トットと駆けて行つたが、すぐに引き返して来た、額に流れる汗を拭ひながら根本と一處に肩を並べた。

「どうしたい竹田は？」

「何でも、川村さんの方で穩便に濟す心得らしいですよ、其の替りもう出入はさせ無い相です、橋場の方もそんな話です、近頃大將、橋場へはつかり泊つてますもんですからね、山の神がヤキヤキして、中々面白いんですよ。」

「フン。」

「亭主が外泊の餘波で玄關の待遇なんか丸で犬猫同然ですから堪りませんや、實は大喧嘩をして飛び出したんです。」

三三 サラダのお客

雷門で電車を降りると、仲店の赤本屋を彼方此方覗いて歩つたが、ふと立ち留つて、

「君は晝飯はまだかい。」

「え。」

と、不意を打たれて眉をあげると、返事をしたことと合點して、

「ちや何處かで一緒に食はう。」

「へえ、晝飯のことですかい。」

「ウン、まだなんだらう。」

と、さつさと先に立つて歩く、と、突然、往うさ來るさの群衆の中から出て、ぬつと根本の目の前に突立つた洋服の男がある、ぢろりと眺めて首を傾けたが、其の儘

スタスタと行つて終つた。

「いやに癡猛な顔をしてゐるなア。」

と、呟やいて、塚田の姿を探すと、後の方で其の洋服の男と何か言ひ合つてゐたがやがて慇懃に帽子を取つて御辭儀をした。

「知つてるのかい、いやに癡猛な髯つ面ぢや無いか。」

「彼男が竹田です。」

「へえ、彼男が……ハアテネ、彼男が竹田か、左様かねえ、可笑なことを訊くやうだが、初めつから竹田つて言つたのか。」

「何うですかね、今の家へは養子に來たんださうですよ、え、と、つい近頃までは……何とか言つてましたね。」

「山本ぢや無いか。」

「左右々々、山本つて言ひましたよ。」

「さうするとやつぱり彼男だ、フフ、可笑しなもんだ、自然と復讐したやうなもんだ、こりや面白い。」

「知つてるんですか。」

と、言つてる内に、仲店を勸工場の所から横へ曲つて、まっすぐに大勝館と三友館の間の通りを抜ける、浅草へ行かうと云ふ人が、左様して何處かで飯を食つて行かうと云ふ人が、その浅草を素通りらしいので、塚田が少々當が付かなく成つて、

「先生、何處へ行くんですか。」

「ウン、飯を食はう。」

と、つかくと、キリン館の前の角店の洋食店の帷幕を肩で碎いた。

「へえ。」

と、塚田は感心して後に従つた、女中は心得て入り口から三つか四つ目の椅子をちよつと直した、シチュを注文して、煙草を吸ひ付けながら根本は初めて落ちついて

顔を見せた。

「先刻の竹田に就てちよつと面白い話があるんだ。」

と、前提して根本は、彼が中學を出たばかりの少年時代に、初めて上京した時、燃ゆるが如き功名心に驅られて苦學のつもりで、彼方此方職業を見付けて歩いた事を語つた。

その時何某と云ふ政治雑誌で編輯の助手を求めてゐたので其所へ行つた、一ヶ月に一回発行の雑誌の編輯だから身體は樂なものだ、勉強する時間も澤山ある、月給も生活に困らぬだけは出すと云ふ旨い話で、話は定つて其日から勤める事になつた一週間つとめ一ヶ月勤めてゐると、身體は樂處ではない、丸で小使の様に追ひ使はれて月々の集金までさせられる、勉強などは逆も出来ない、思ひ切つてやめやうと思つたが入社以來月給と云つては一文も貰はない、五十錢三十錢位なら電車賃とか辨當代とか言つて呉れるだけなので今更身動きも出来ない。

それでも最初入社した時に預けた保証金が二十圓ばかりあるので、それを戻して貰はうと思つて掛合つたが中々言を左右に托して渡さない、背に腹は變えられない食はずに働いてもゐられないから、社の廣告料と購読料が月末に少し纏めて集つたので、保証金と差引くつもりで其儘退社して他へ下宿して終つたが、あの時の苦しさは未だに忘れられない、殊にその時、

「俺には戀人があつたんだよ。」

話と關係の無いやうな事を言ひ出したので、塚田はボカンとして目を睜つた、根本は笑ひながら、折から女の運んだシ、チ、ウ、へ洋刀とフォークを當て、

「サラダを持つて来い。」

「あの、サラダばつかり。」

と、女は微笑して根本の顔色を伺つた、彼は無言で頷づいて、塚田の方へ向き直つて話とフォークを續けた。

その戀人の兄が、ふと雑誌社を訪ねたことがあるさうだ、その時、社の留守居をしてゐた者が口を極めて彼の非を擧げたので若き戀はハタから破られて終つた。

「その時は社長兼主筆と云ふのが山本だよ、今の竹田だよ、爾來、俺は機會さへあればきつと復讐をするつもりでゐた、所が偶然に彼の悪行を妨げたんだから痛快だね。」

「天意ですな、基督教の所謂神の攝理ですな。」

「あゝ云ふ不徳漢は社會的に葬つて終はなければ不可、川村家で穩便な所置をとつたのは……。」

「天意に背くものです。」

と、塚田が引とつて言つた、根本は唯笑ひながら、ナイフの柄でテーブルをコツコツと叩いた「サラダばかり」を彼の前へ並べて女が次の注文を訊いて去ると、塚田は思ひ出したやうに、

「ああ云ふのが全くバチルスつて言ふんですね、何でも、チラリと訊いたんだからよく解りませんけれども、あの人の中學時代の友人で今成功してゐる人があるんですね、其の人の奥様が娘時代に何か不品行があつたんですね、此度は其家をどうするとか言つてましたがね。」

「頭腦の中には人の平和を攪亂することより外は働いてゐないんだ。」

「全く左様かも知れませんが、先生、芝居の方は何うなりましたね。」

「君にも種々心配して貰つたつけね、俳優も全部決つたし、實行の順序も大凡そ定まつたし、もう何時手をつけてもいゝやうに成つてゐるが、どうも資本が思ふやうに行かないでね、残念だよ。」

「然し、いゝ資本家が現はれたぢやありませんか。」

と、ニヤ／＼笑ふ。

「何所に？」

と、怪訝顔をして、折から女の持つて来たピフテキの皿を引き寄せた。

「川村はどうです、あの娘は先生に氣がありますせ、今日も行つたんでせう。」

「駄目々々。」

と、根本はフォークを突きながら頭首を振つた。

「俺は左様云ふ事は嫌だから、女を欺して金を引き出さうなんて氣には逆もなれない。」

「當世には向かない性質ですね。」

塚田も笑つて、強てその後を續けやうとはしなかつたが、ふと帷幕の隠から外の人通りを覗いて見て愕然として大聲を出した。

「何だ、君、誰か通つたのか。」

「驚きましたね、眞實驚きましたよ。」

「何だい、一人ではつかり承知してゐないで話してもよからふ。」

「ですけれどもね、兎に角、相當な紳士の名譽にも關係することですが……何有貴婦人が新派の下廻り然たる男と一緒に歩いてゐるんですがね、ハツテネ。」
一人で考へ込んで終つた。

三四 木の 下 閣

青葉を吹く風が、セルの羽織にネルの單衣を着た素肌、快よい程の冷やかさを與へる五月も半ば 過ぎた日の黄昏、赤坂氷川町の正木家の内玄關で、小腰を屈めて訪れたのが彼の六造であつた。

「何か御用ですか。」

此の頃來たばかりの、人馴れない小間使は餘り立派にも見え無い此の客を、眼下に見下して言葉も荒々しかつた。

「へへ、六造と云ふケチな野郎でげす、奥様にちよつとその御目通りが願ひたいん

で、へへ。」

と、揉手をしながら、むやみと追笑らしく笑ふ態度の空々しさに、若い小間使は馬鹿に腹立しさを感じた。

「奥様は被在いませんよ。」

「譯があるか無いかお前さんよく知つてゐますね。」

「そんな譯は御座いませんがね。」

「ははあ、此つあ一言もねえや。」と、故意とらしく頭をかいて、

「ちやそのお竹さんと云ふ女中さんに、ちよつと六造が参りやしたつて仰有つてお呉んない。」

「お竹さんですかね。」

「へへ。」

「ちよつと待つて下さる。」

と、小間使はバタ／＼と奥へ駈けて行つた、折柄、門のあたりで、

「お歸りッ。」

と、長くあとを延た車夫の聲がして、奥からは裾さばきの音さら／＼と、女中五六人、表立關の方へ出て行つた、行きがけに年増のお竹がちろりと睨んで、

「今時分ノコノコとやつて来て困るぢやありませんか。」

「だがね、私も忙しい身體になつちまつたんで、是非とも其の御願ひがあるんです。」

と、云つてる内に、車の轍が立關先でとまつた、お竹はアタフタと、

「兎に角、御覽の通りで丁度旦那様が御歸宅なんですからね、バツが悪いだらうぢや無いか、もつと後に来て下さいよ。」

「そりや私も察しやすがね、何しろ一時間二時間を争ふ用なんですから、是非ともその奥様に、野郎が來たと云ふ事だけ仰有つて下せえまし。」

「そりや言ひますがね、今日は奥様は被在らないんだし、困るわ。」

と、ヤキモキしてゐる後に、エミヤの手を曳いて奥へ通らうとする武文が、不審相に眼を光らして立ち停つた。

「竹、何だ、何か御用のある方か。」

「いゝえ、あの、何でも無いんで御座いますよ。」

と、少からず慌て、眼顔で六造に知らせながら、追ひ立てるやうに格子戸の外へ出してやつたのを尻目にかけて、若い先刻の小間使ひは帽子と洋杖を持つて、主人の武文の後に従つた。

「母さんはゐないのか、エミヤ。」

「何うですか、私、存じませんでした、あの何なら見て來ませうか。」

「ウン、それには及ばん、たとへ居た所で夫の歸宅を迎へんやうな妻に、わしは逢ひたいとは思はん。」

書齋の長椅子に、洋服も脱がないで其の儘身體を投げ出して、武文は悲しい聲でハキ出すやうに云つた。

「お父様、そんな事を仰有らずに、私が見て参ります。」

「いゝよ、お前は心配しなくもいゝ、お前が母ならぬ母の爲に苦勞をするのを見ると、わしの胸は破れるやうに痛む、エミヤ、堪忍して呉れ。」

「勿體ないことを仰有います。」

エミヤはその長椅子に取り縋つて泣いた。

夫婦の間に子のない武文の家庭は決して楽しいものでは無かつた、何に付けて嫁に折れてゐた母も、三郎が世帯を持つてからは若い者の監督がてらなどと言つて其宅へ行たきり、再び赤坂へ歸つて来ようともしなかつた、お鶴の可愛いゝのもお葉が思つたより優しいのに老の氣の嬉しさもあつたが、智慧子の角々しい妙に行儀めいた態度がとかく面白くなかつたせいもある、それも智慧子が不平の一つであつ

たし、今まで忙しいと云つて朝も早く出て夜も九時か十時でなければ歸らなかつた武文が、エミヤが来てからは朝も心持ち落ちついてゐるし、夕方は日暮れにはきつと歸つて来たなども妙にヒガンだ氣を起させたものだ。

面白からぬづくめでゐる所へ、ふとした若氣の誤まちから情を通じた事のある六造がヒヨツクリ姿を現はしてから、妙に心が若やいで變な謀反氣を起して、あらぬ悪い評判も立てられる程厚く塗り立てゝ外を出て歩いた、武文の歸る時が来ても顔を見せない事が多かつた、時とすると本當に家にゐない事もあつた、さうでない時には、何か事を拵らへてはエミヤに辛く當つた。

エミヤは、自分が来てから父母の間が圓滿に行かないのを、ウスウスながら推量してゐた、悲しいことであつたが何うとも出来なかつた、ならば自分の力で父と母の冷たい感情を和げやうと試みたが、何時も父には涙で打ち消され、母には反對の意味にきかれて嘲罵されるのがオチだつた、何所へ自分の悲痛を訴へやうかも、エ

ミヤにはアテがなかつた、たよりにするのは三郎ばかりであるが、その三郎の家へも義母の機嫌が悪くて行かれる希望もなかつた。

今も、帰宅したばかりの父の機嫌が悪く、母のことなど噂さすのを訊くと、身を切られるよりも辛く、満身の勇を鼓して義母を探しに出た、その義母が、居間にもあなかつた、もしやと思つて裏庭へ出て、黄昏の闇のたち籠むる植込の間を縫うて、木立の茂みに人の聲、ハツとして縮んだ。

「だつて困るぢや無いか、此の間も三百圓と云ふ金をやつたのに。」

「本當にもう是れつ切り参りやせんから、どうか二百圓だけ、へへ、御貸しなすつて下せえやし。」

「だつて右から左へおいそれとよこせぢや私も困るぢや無いか。」

「今日とは言ひやせん、明日まで御待ち申しやせう。」

「困るわね、本當に。」

「無理に欲しいとは言ひやせん、ぢやようがす、私も男だ。」

「あれ、お待ちよ、上ないとは言ひはしないやね。」

「いゝえ、ようがすよ、無理に戴かうたア申しやせん、はいようがすよ、すつぱりと綺麗に諦らめやせう、その變り奥さん、貴女も無事ぢや済みますまいせ。」

「そんな大きな聲を出して……仕方がないわね。」

「こりや地聲だ。」

「あげますよ、與ますがね、今夜はありませんよ、明日の晩の十一時頃、芝の山内まで来てをくれよ。」

「へへ、間違ひはありませんね。」

「大丈夫さ。」

と、ガサくと物の音、悪いと思ひながらつい立聴きして終つたが、然し、日本の言葉は餘程落ちついてゆつくり聞かねば解し兼るエミヤには、詳しいことの事情は

判明なかつた。

女の聲は智恵子で、男が六造であつたのは言ふ迄も無い。

三五 秘密の曝露

悪いことだと気が付いて、エミヤが静かに踵を返した時に、角立つて荒々しい智恵子のこえが背から追つかけた。

「エミヤ、些渡御待ち。」

「ハイ。」

と、何気なく振りかへつて見て、物凄い程血相の變つた智恵子の顔色に我にもあらずギョツとして立ち停つた。

「お前、何に茲へ來ました。」

「あの、お父様が御歸宅になりましたから、母様を探ねて。」

「今の話を訊いたらよ。」

「は、い、え。」

と、エミヤは苦しげに頭首を振つた、智恵子の眼がギロ／＼光つた。

「訊いたね、訊いたに相違ないね。」

と、矢庭に躍りかゝつて髪の毛をつかんで引き倒した、上からノシ懸つて、女だてらにあられも無い、拳を固めて丁と打つ、打つて足らず庭下駄をあげて腰のあたりをハタと蹴るのであつた。

「堪忍して下さい、阿母様、悪いことをしました。」

「えッ、訊いたんだね、畜生ッ、どうして呉れやう。」

「アッ、痛ッ、母様、堪忍して……」

「えッ、うるさいッ。」

と、履いてゐた庭下駄を振りかぶつて力任せに打たうとした其の手を、背からビタ

リと壓えた者があつた。

「何をするんです、停めないで下さい。」

「お智恵、お前こそ何をするツ。」

と、鋭い聲、主人の武文が嚴然として立つて居た。

「停めないで下さい、癖になりますから、私が少し仕置してあげます。」

「エミヤが何をしたのだ。」

「はい、人のあとを付けて来て立ち聞きなどすると云ふことがありますか、假にも母の私に、何か悪いことであるやうに、悪いことがあつたら露いてやらうと云ふ汚ない根性から左様いふこともします、是からもあります、私が立派に折檻してあげます、貴郎は何にも仰有らないで下さい、一體此の子は私を馬鹿にしてゐます。」

「さて。」

と、エミヤと智恵子の間へ入つて、エミヤを庇護ふやうにして、

「お前に立ち訊きされて歪しいやうな後暗いことが無ければそれでいゝぢやないか。」

「えッ。」

「エミヤは何も暴露の何のと云ふ考へで来たのでは無い、私が歸つてもお前が見えないから、何かと思つて探しに来たのだ、疑心は暗鬼を生ず——下らない事を言つたりしたりすると、お前の人柄にも拘はらふ。」

「口惜しいツ、貴郎私を疑ぐつてらッしやるのね、昨日や今日のエミヤの陰口を信じて、十年も十五年も連れ添うてゐる妻の私を疑つてらッしやるのね。」

「エミヤは別段お前のかげ口をきいた事は無いよ。」

「あゝ、口惜しい、私しや口惜しい。」

「空々しいことを仰有るな、今裏口から出て行つたのは彼男は何です。」

卒然として後ろに聲があつた、智恵子の驚愕は勿論、武文もエミヤも同じやうに

振りかへつて見ると、志水三郎が、裏木戸をあけて入つて来た。

「叔父様。」

と、エミヤは今までの苦痛も忘れて、三郎の袖に縋つた、その手を姪の接吻に任せながら彼もエミヤの額を撫で、

「可哀想にお前も苦勞をするね。」

「三郎さん、何ですか聞き捨てにならない事を仰有るわね、もう一度承はりませう。」

と、智恵子はもう破れかぶれと、眼の色を変えて三郎に詰めよつた。

「言へと仰有るなら何度でも申しますが、然しそんな事を荒立てたら嫂さんの恥、兄さんの恥、正木一家の恥、さらりと聞き流した方が貴女の御爲ではありませんか。」

「と云つて逃げやうと仰有るんですか、私も正木武文の妻です、悪名つけられて黙

つてはゐられません、さあ仰有つて下さい、何所までも證明を立てなければなりません。」

「さて、お智恵。」

と、武文はとめた。

「いえ、貴郎も何故言へと仰有らないんですか、妻があらぬ名を付けられるのを黙つてきいてゐますか。」

「悪名も證明もない、言は内々の話だ、どう結局が就かうが所詮は我々の間だけで済まにやならぬ、三郎、お前は失言をお智恵に詫びたらよからう。」

「叔父様、どうぞ母様に。」

と、エミヤは哀訴するやうにその叔父を打ち仰いだ、彼は黙として、植込の木立を洩れる星の光を空に眺めて、やがてハラハラと涙を落した。

「詫ぶ可き時が来れば詫びやう。」

「何ッ。」

「まづそれまではエミヤは俺が預かつた、エミヤ、叔父さんと一所に自宅へ来い。」

「あれ、叔父様。」

と、エミヤは曳かれる三郎の手を拂ひもかねて泣きながら、

「母様どうぞ、私がお母様のおそばにゐられるやうにして下さい。」

「お前は茲にゐたら殺されて終ふ、いゝから俺と一所に來い、兄さん、エミヤは三郎が預かりましたせ、不貞の女房に手を噛まれないやうにしなさい。」

「何ですつて、三郎さん。」

「黙れ、ビツナイ、盗人猛々しとは貴様のことだ、何の必要があつて遊人の六造に三百圓二百圓と云ふ金を用立ててやる、人は知らないと思ふか、馬鹿めッ。」

「三郎、姉に向つて言葉がすぎるぞ。」

「姉らしく無いから、言ひたくないこともつい口に出る、エミヤ、お出でと言つた

ら何をグズグズする。」

木立闇を縫うて、三郎は泣き入るエミヤの手を取つて、あとをも見ずに立ち去つた、武文も智恵子もしばらく物も言はずに、闇中、お互の心を模索するやうに睨み合つてゐた。

三六 脅喝の遺損ひ

「旦那様にお客様が。」

と、小間使に驚かされて、武文も智恵子も我に返つて立ち上つた。

「客室へ通してをけ。」

來客の誰であるかも知れぬ餘裕はなかつた、謎のやうな弟の言葉の意味を頭脳の中で繰り返しながら、武文は力なげに西洋風に拵らへてある應接室の扉をあけた。

「私が正木……」

と、言ひながら、初めて客の顔を見て、又新しい驚愕に打たれた、客は竹田大造である。

「竹田君だつたか、誰かと思つた。」

「はッは、名刺をあげた筈だつたがあの初號活字が目に入つちまふやうぢや、君も此のころ餘程ぼけたね、確固し玉へ。」

「失敬々々、女中が何とも言はなかつたもんだからね。」

と、言ひながら、對ひ合つた椅子に腰をかけて、卓上のベルをおした。

「どうだい近頃。」

「駄目だよ、録な事件もないのでね、辯護士も上つたりだ。」

「誤判なぞと云ふ事が問題になつてるが、實際かねえ。」

「裁判官だつて神様ばかりぢやないから、時には誤判もあらうよ。」

「然し死刑に當る罪なぞ間違はれちや大變だね。」

「仕方が無いんだらな、今日の制度では。」

「へえ、仕方がないで済むものかね、俺も裁判官になればよかつた。」

「冗談ぢや無い、時に用があるんだがね。」

「辯護士から用があるなぞと切り出されると馬鹿にゾツとするね、然し何だい。」

「外ぢやないがね。」

と、息を呑んで切り出した時に、小間使が紅茶を持って來た。

「君は左利の方だつたね、オイ、お茶の代りにビールがよかつたな。」

「あの、おビールを持つてまゐりますか。」

「ウンウン、急いで、何か水菓子があつたらう、二つ三つ。」

小間使が立ち去るのを眺めて、竹田はその逞ましい髯面にニヤリと薄氣味の悪い笑を洩らして、

「君は六造と云ふ男を知つてゐるか。」

「えッ、何ッ六造だ。」

ビツクリして椅子を離れたが、静かに考へ直して、又落ちついた、今の今、三郎から謎のやうに掛けられた言葉の内、その男の名が六造であつたと思ふと、彼は煮え返るやうな胸くるしさを覺えた。

「知らなきあ、友人の義務として一應は君の耳に入れとかねばならんしと思つたので、それで實はわざ／＼やつて來た。」

「さうか、有り難う。」

武文の態度は聲と共に静まつた、竹田は冷やかに眺めて、

「御存じかな。」

「恐らく知らん方が吾輩の幸福かも知れん。」

「勿論——さうだ、然し、その六造なる者は卑しい無智の男だ、その男の口からも

し正木君一家と六造との關係が世間へ洩れたら随分と可笑なものだぜ。」

「君はその六造といふのを知つてゐるのか、さうしてどう云ふ所から知己になつたのか。」

「吾輩近頃踊を習に行く。」

「へえ、君が。」

「笑ふな、その踊の師匠の倅だ、遊人でね、タチのよく無い男だ、些渡顔のノツペリしてゐる所から貴婦人令嬢なぞを蕩しこんで始末に終えない男だ。」

「左右かなア、成る程。」

「ま、然し、そんな話はそれでいい、君が六造をウスウスでも知つてゐるならば夫でいい、所で又別の用事だがね、吾輩此の頃非常に窮迫してゐるんだがね、少しばかり金を借りたんだが如何だらう。」

「ウム、幾何ばかり。」

「何有僅かだ、最もいつ返済し得るか些渡當は付かないが、その替り、決して六造なる男を足踏みもさせないのは勿論、當家との關係を一言半句でも喋べらせることぢや無い。」

「ウーム。」

と、腕を組んだ、時に、小間使ひがビールと蜜柑を持って来て、カタばかりのお酌をする、武文が目顔で立ち去らせた、遠慮なく満を引き乍ら、竹田は、

「貸して呉れられるかい。」

「ウン、お貸し申さうと言ひたひが、それは謝絶申さう。」

「左様か、然し僅少だよ。」

「十圓でも二十圓でも謝絶しやう、六造なる男が吾輩の家にどんな關係があるか、その足どめ口どめをさせやうが爲すまいが、吾輩の知つた事ではない、勝手にどんな事でも言つて歩かせるさ。」

「へえ、ぢや君は、君の名譽と體面とが傷、けられても構はんのだね。」

「敢て構はん、車夫馬丁、遊人のやうな男の流言を信じて吾輩を兎や角批難しやうとするなら、それは世間の噂さに任せやうよ……男らしくも無い、君も眞正面から金を借りに来い、厭に皮肉なおどし文句を並べないで貸して呉れと云ふなら、千や二千の金は今晚にでも用立てゝやる、何だ、親友顔して、體裁のいゝ強迫ぢや無いか。」

「駄目だね。」

「くだいよ、出直して來玉へ、吾輩の名譽を傷付やうとする前に、まづ君自身の立場を失はんやうにし玉へ。」

「よし分つた、ぢや失敬する。」

と、竹田は満面朱をそゝいだやうに怒り立つて、荒々しく椅子を離れた、ベルを押して再び女中を呼んだ武文は、靜かに客の歸る由を告げて立關まで見送らせた。

竹田が歸つて終つても、彼は茫然として應接室に腰をかけてゐたが、俄かに遺瀨
ない苦痛を覚えて、そこにあつた麥酒のコップを取つて濺々と濺いで、息もつかず
に飲みほした、一本飲んで終ひ、二本目の壺もカラにすると、俄かに身を起して玄
關へ出た、女中は慌しくあとに従つた。

「御出掛けで被在いますか。」

「ウン、帽子と、夏の外套を持つて来い。」

「お車を用意させませうか。」

「いや、よろしい。」

地ビタを洋杖でコツ／＼叩きながら、何所を當ともなく家を飛び出した。

三七 酒 匂 貝

何所をどう歩つたか覺えは無い、それから一時間ばかりの後に、武文は濱町河岸

に立つてゐた、波の聲も耳に入らず電車の響も聞えず、大川端を川風に吹かれ乍ら
何所を心のやりどころ、むやみに氣ばかり急て足ばかりがフラフラして居た。

兩國から、柳橋へ出て、代地の河岸のとある小路、紅くぼやけた軒燈がいくつも
せゝこましく並んでゐる通りの突き當り、お待合花の家と云ふ瀟洒な立看板をにら
んで、意氣な格子戸をがらりとあけた。

鈴の音はしなかつたが女中がすぐに迎へた、無言で帽子と外套を渡して、明る
い廊下を突き當つて階段を上つた、庭に面した静かな坐敷、半ばあけ開いた障子越
しに、植込の木立、青葉に水の滴たるやうに電灯の光がさし添うてゐた、協息に身
を凭せて座ると一所にため息を吐き出した、貰を付けると間もなく、立ち替つた
年増の女中、三十餘り、眉毛のあとを青く残した意氣な顔を見せて、茶をすゝめ乍
ら物馴れたけはひに嫣然した。

「入来やいまし、よう御越し大分お暖かになりましたわね。」

「はッは、陽氣は暖かいが懷中はまだ冬空で困ります。」

「御申戯ばかり仰有るわ、知らない人が聞くと真にうけますわ。」

「本當だ、それに恚う年を老つちや……。」

「あら。」

と、故意とらしく睨む真似をして、

「これでもまだ若い氣で居りますのにね、そんなに老年に御覽下すつちや御恨みですわ。」

「素話して若く見られやうツてえのはちと押が強いな。」

「ほほ、御催促で恐れ入ります、ソコニソツが御座いますもんですか。」

手を叩く迄もなく、若い銀杏がへしの女中が膳を運んで来た、徳利の形にも、猪口の焼方にも、お通しものの小皿に盛つた軽い酔のものでも、何れは凝つた來歴も因由もあらうけれども、彼には何の興味も呼び起さなかつた、猪口も自然とハカが

行かず口が重かつた。

「馬鹿に温順にお成りですわね、ドンドンお重ね遊ばせよ。」

と、軽く鮮やかな御酌ぶり、媚びるやうに見上げて、

「若妓のを一人お呼びになつたら如何？ 私のやうな婆では折角のお酒も旨しくな

いと云ふものですわ。」

「婆でも結構、お前さんならば。」

「御冗談仰有ると真にうけますよ。」

「オヤ、本氣でいつてるのに冗談に訊いてるんだね、ちや仕方がない、一人その若妓を呼ぶことにしますかね。」

「お馴染がおあんなすつて？」

「さればさ、吾輩もそれ程器用だと今までお前を相手に苦い酒を呑なくも濟んだんだがね。」

「オヤ、土俵際で背負投はひどいわ。」
と、わざと目を睨つて、

「本當にないんですか。」

「勿論ないよ。」

「ぢや、手つとり早く照香さんは如何、今丁度他の御座敷が済んで、お帳場で話してゐるんですの。」

「はッは、手ッ取早くか、はッは。」

「不可いことッ。」

「構はんよ、誰でもいゝんだ酒の酌さへして呉れゝばいゝ、餘り騒々しくなければいゝ。」

「ぢやきつと御氣に召すわ、温順しくつて親切で色氣抜きつてな所でね、呼んでやつて頂戴な。」

『よしよし。』

と、聊さか酔うて目をトロトロしたのを笑ひながら見て、折から徳利を提げて来た若い女中を願でしやくつて、

「ぢやね、照香さんと呼んで頂戴。」

「照ちゃんの来る迄、こんな婆でお不足でせうけれども。」

と、年増は徳利の底をあげた、と、襖のかけに美しい半面を見せて淑やかに三指をついた若い藝妓——とことわる迄も無い、初心らしく耳の根をぼつと染めたのが却つて艶めかしいうす紫の縮緬の肩に灯影が紅く流れて、博多の帯は浪に千鳥、美しい花の色が裾に浮いてゐた。

潤澤な黒髪の一絲亂れの高島田、肉の豊かな、透き通るかと思ふ程の白い頬、黒眸の両眼が露を含んで人を魅すかと武文は思ふのであつた、やがてあでやかに嬌然、口元に笑を湛えて、裾をするゝ、静かに寄り添うて年増の女中に低音で、

「姐さん有り難う。」

盃をあげた儘、武文が茫然してゐたので、つゝまじやかに徳利の底を壓えて、

「貴郎、お酌。」

盃の行き交ひ二つ三つ、やがて女中がちよつと座を外すと、武文は額の汗をぬぐつて、羽織を後背へかなぐり捨てた、光るやうに磨いた床の間に古銅の花瓶、それに花はなかつたが床柱にかけた水牛の角に、白い菖蒲が無造作に挿してあつた、その花の白い一固りが明るく火を灯したやうに見えた、妓は彼の脱いだ羽織をたゝみ乍ら、

「少し、御暖かいやうですわね。」

「ウンもう此那陽氣だらう。」

「みんな開けませう。」

妓はすぐに立つて、丸い小窓の障子をあげた、室の内の電燈がさらりと流れて外

面へこぼれた、木立の葉末を墨色鮮やかに照らし出して、さわやかな風の戦きが、何所からともなく錆びた音じめの三の絲——星明り、晴れたる空に響かせて中へ吹いた、思ふともない面白からぬ家庭のこと、妻の不したら、弟の愛想づかし、竹田の恐迫、不快の念がムラムラと胸を昂ぶらせた。

「酒だ〜。」

「たんと召し上れ。」

と、莞爾笑つて漾々と濺いだのを息もつかずに呻つて、

「もう一ぱい。」

ぐつと突き出すと目を睜つて、片手に片袖をおさへて嬾やかな腕を半ばあらはし打ち仰いで酌をした、半分飲んで盃を捨てて深いため息と共に、

「ああ、酒もつまらん。」

「濟みませんわ。」

と、妓はそこへピッタリと手をついて、

「私が行き届きませんものですから、折角呼んで戴いても詰らないやうなことにしまして、申譯も御座いません。」

「いや左様ぢや無い、決して左様いふ譯ではない、そんな心配をしちや不可、さあ景氣直しに賑やかに御座付を願はうぢや無いか。」

と、武文は初心げに、照香の顔を茂々と見入つた、折柄、年増の女中、すらくと客のそばへ寄つて囁やくやうに、

「お氣に召しましたか。」

「ウン、何有。」

と、彼は苦笑ひした、白けかゝつた座敷のつなぎにと、照香はキリキリと三味の絲を引き締めた、四十に近い武文に、今は智恵子もない、エミヤもない、母もない、家もない、彼は默然として照香の顔をながめて居た。

三八 お前ごならば

照香は温順しい藝妓であつた、時とすると素晴らしい俠な事を言つたり爲たりするが普通の人には普通に挨拶してゐたのがひどく武文の氣に入つた。

その夜を初會に、それから照香の客は殆んど武文一人であつた、他の座敷はあつても謝絶つて終ふ位に、正木は照香を離さなかつた、照香にとつても最初はむつかし相なと思つた客も、馴れれば親しくなつかしかつた、猥らしい、女の機嫌ばかりをとるやうな、金をひけらかすやうな澤山の客の中で、厭味一つ言はないで唯酒を飲んで時間まであつさり遊んで、どんな事があつても十二時にはきつと切り上げて歸つて行く男の心は頼もしかつた、それに分別盛りの男の、胸に何か屈托でもあるかに見えるのが哀れにも痛ましかつた、それを慰めてやりたい、忘れさせたいと思ふと、優しい言葉も態度も自づと顔に現はれた、つとめ離れた親切をつくしてなび

くとも見せた柳の糸の、然も何所をどう取らうと當も付かず、武文と照香の仲は普通の客と藝妓のつきあひでしか無かつた。

然し、

『どうも仕方が無いな、吾輩はお前と一所にゐる時だけは氣も心も晴々してゐるが家へ歸るともう胸がムシヤクシヤして詰らなくなつて堪らん。』

と、時折、彼は串戯でもなく言つた、照香は笑つて取り合はなかつた。

『御上手ばかり仰有るわ。』

『吾輩も女に上手口が聞ける程苦勞がないといふと思つてゐる。』

『それが本當の御上手と云ふものよ。』

『左様取るならそれでも構はん、上手で無い證據を見せやう。』

と、深くも思ひ入つたる氣色、アナヤとばかり照香は胸をおさへた。

『そんな事を仰有るより貴郎はやつぱりお酒を飲んで、あつさりと遊んでらッしや

る方が男らしくつていゝわ。』

『爾うかなア、吾輩の言葉は何うしても眞面目には訊かれないのかなア。』

『お上手でない證據を見せると仰有るのは、落籍さう、女房にしやう、と恚う仰有

るんでせうけども、誰が貴郎、今時料理店へ金びら切つて女房を探しに来るものが

ありませう、藝妓の方でも同じことですわ、御座敷へ出てゐる内はお客様の爲には

生命も金も入らないような嬉しがらせは言つても、本當は口先だけの、商賣の教へ

る當座の御世辭ですわ、浮いた人の御座敷はハシヤいで見せ、静かな事の好きな方に

虫も殺さないやうな初心な顔して見せ、眞面目な人には眞面目に、不眞面目な客

には不眞面目に、何れは先様の御心持ち次第、藝妓に心は御座いません。』

『ウム、然し吾輩の眞面目なのはお前も察しが付かう。』

『眞面目に、シンから御心持ちを御察しして御相手はしてゐますけども、それだか

らつて私しや何にも貴方に落籍して貰はふの女房にして戴きたいのと、そんな大そ

れた心持ちは御座いませんわ、よし又此方ではおなつかしいと思ひましても貴方は御身分のある方、私は卑しい藝妓風情、何の、及ばぬ鯉の何とやら、夢にもそんな事を考へた事はありませんわ貴方には、昨今でありますけれども種々と御ひいきして戴いてどんなに嬉しいと思つてるでせう、唯お酒の酌をさせて戴くだけで厭なこと一つ仰有るぢやなし、本當に有り難いと思つては居りますけれども……」

「それも商賣が教へた當座の御世辭か。」

「あら、何しませう、私しやシンから有り難いと思つてます、貴方に御世辭の口先のと云ふつもりでものを申上げたことは本當にありませんわ。」

「どうだか分るもんか。」

「本當に、この胸が割つて見せたいやうですわ。けれども矢張り貴方は御客様で私は藝妓ですわ。」

蝙蝠が出て來た濱の夕すゝみ、川風さつと吹き上る涼しさ、はても無い大川の流

れはヒタヒタと畔を洗うと墨堤一里、花にも劣らぬ葉櫻の眺望は赤い影を水に浸して底も分らぬ深さを見せてゐた。

その向島、枕橋の八百松で、今日も武文は照香と遠出の、川に面した小座敷でビール

の壘が一二本立ち並んで、稍顔に赤味をあらはして物語つてゐた。葉櫻のかげには暑を避けて往うさ來るさの人の歩みもゆつたりと落ちついてゐた意氣な浴衣、涼しげな單衣、着流しの、羽織つた？何れにしても足も身も輕げである、千住通ひの汽船が静かな波を破つて、どす黒い煙を吐いて物悲しげに汽笛を鳴らして過ぎると、水の上に白くあとを曳いて水鳥が二三羽バツバツと舞ひ上つた、橋場今戸のあたりには灯影がちらちらと涼しい。

「ねえ、私しや詰らない藝妓ですわ。」

「その藝妓がよくつて、吾輩はせつせと通つて來る、はッは、吾輩の方が餘程詰らない男だよ。」

『そんな事は無いわ。』

男の膝に手を置いて、凝と見上げた眸の色に、男の氣はそいろ、

『詰らない男だと笑つてくれるな、吾輩は斯うしてお前と話をしてゐさへすればそれで氣が済むんだ、少しの間でも離れてゐると心の底がうす寂しい、といつて逢つてる内でも全く酒の酌をして貰ふだけ話の相手をさせるだけに過ぎないんだが、それでも吾輩の氣は済んでるんだ、吾輩には正直、人には打ちあけれん苦痛がある煩悶がある、その爲にはたつた一人の弟に見離され、可愛い娘も連れて行かれたその苦腦を忘れやうと思へばこそ夜毎々々の酒浸り、酒はうまいとも思はぬがお前と逢ふのが樂しみだ、お前と話をしてゐる内は悩みも苦しみも忘れたやうになつて終ふ——吾輩のこの心持ちをお前に解つてくれとは言はないが、十九や二十の浮いた遊びぢや無い、分別盛りの吾輩が家も身も顧みないで打ち込んだお前だ、少しは察して呉れてもいゝぢや無いか。』

『お察し申しては居りますけれども、それから先は縁づくめ、神様でなけりや解りませぬわ。』

と、手巾で眼を掩うた、男の情の嬉しからぬではないが、さりとして、

『私しだつて何時まで藝妓なんぞしてゐる心得はありませんけれども、貢がなきあならない弟や妹もありませんし、年をとつた父親が半身不隨で寝てますし母親一人に何時まで心配させるのかと思つと、シンから泣きたい晩もあります。』

『お前の身の立つやうにしてやらう。』

『厭なお客の機嫌氣襪をとつて、浮いたくで暮してはゐますが是でも一人で考へてると泌々厭になりますわ、家の主婦を説き付けたりお茶屋さんから話させたり、のつ引ならぬ破滅にして是が非でも思を逐げやうとするお客様の手を、どんなに辛いくるしい思ひをして逃げて來ましたことやら、考へてもぞつとしますわ、それなのに貴郎ばかりは厭なことつて少しも仰有らずお前の心持をきいてから主婦にも

雨親にも話して身の立つやうにしてやらうつて仰有るんですから、本當にそれだけでも嬉しいと思つてます。』

照香はいきふした、そのつぶし島田の髪がハラハラと揺れる。

天は高く澄んで青い、白い雲の團がふわふわと浮いてゐて、暮れかゝる日に榮えて赤く光る、西のあたりの夕やけ空に鳥のひとつがひ黒點を描いて消えた、と、一隻の荷足船が、櫓の音ゆるやかに川下へ下つて行く、夫は櫓を、妻を棹を、兒は嬉々として戯れてゐたのを、ちつと眺めてゐたが突然、

「貴郎、私のやうなものでも末長く可愛がつて下すつて。」

と、男の膝に取り縋つて、露をふくんだ眸に打ち仰ぐ、男は物も言はずにその手をとつて引き寄せた。

涼しい川風が、軒のつり葱をゆすつてりんりん風鈴が鳴る。

三九 粹な女房

涼しい風が伊豫簾をゆすつて二階一ぱいにめぐる、假寢の夢を破られて三郎はあわてて浴衣を引つけて白縮緬の兵児帯をぐるぐると巻き付けて、やがて階段を踏み鳴らし乍らやつて来た兄の武文を迎へた。

「珍しいな、兄様が御來臨とは。」

「はッは、兄弟の情は又別だよ。」

と、何故か苦笑しながら坐つた、相對して座ると弟ながら三郎の顔をまともに見るに堪えないで、しばらくは扇使ひの音をばさばさと立てて肌を風をいれてゐた。

「外から來るとムツとしませう、裸體になつたらどうです、夕涼みよくぞ男に生れたるッてな事を言つて。」

「はッは、それ程でも無い。」

と、云つてる所へ、お葉がビールの壺を持って来た、上り口からお冬の出してよこす洋盃や水蜜桃などを受けとり乍ら、

「お冬や、阿兄様を煽いでおあげなさいよ。」

「いやそれには及ばん。」

「でも中々御暑う御座んすわ。」

二人の間に洋盃を並べて、兄から初めて波々と濺ぐと、

「生憎と今日はエミヤさんがお鶴と一所に出かけましてね。」

「鶴ちゃんも仲がいと見えるね。」

「ほほ、本當に姉妹のやうで御座んすよ。」

「然し、種々御面倒かける、長いことは言はん、もう少し待つてくれ。」

「いえ、何の阿兄様、何時まで居りましたつて構やアしませんわ、行き届かないもんですからよく三郎から叱られますけれども、兄さまも時々被來しやつて下さらな

いとエミちゃんも御可哀想ですわ。」

「飛んだ所で叱られたね、はッは。」

と、武文は氣持よささうに哄笑して洋盃を傾けて、

「お前も偶には赤坂へ来い、何時まで野暮で苦い顔をしてる吾輩でもないつもりだ。」

「伺はなければなら無いんですけれども、私のような卑しい者が参りましたら阿嫂様や御親類方が何う思召しませうやら、わざと御遠慮申上げて居ります。」

「何が卑しいことがある、弟の家内ぢやないか。」

「だが兄さん。」

と、三郎が笑ひながら口をはさんだ。

「その弟の家内を兄さんは少々面白く思つてゐなかつたのは事實だからな、今日不意にそんな事を言ひ出されると聊さか面喰ひますね。」

「既往は咎めるな、吾輩が悪かつた。」

「そんな昔ばなしはさらりと風に任せた方が涼しう御座んすわ、兄さま、もつと御重ね遊ばせな。」

「其事々々」

と。武文は浮々した調子で、

「吾輩は三郎が羨しいよ。」

「何故で御座いますか。」

と、眞顔なお葉を顧みて、

「はッは、お前のやうな美人で氣の利いた妻君を持つてさ。」

「あら、タント仰有いませよ。」

と、それを機會に、お葉は顔を赤らめ乍ら階下へ降りた。

紺碧を湛えた空を背景に、上野の森の青葉の尖に、むくくと湧き立ち返る白い

雲の峯が、強い午後の日光に燃えるかとはかり目を射るのに、二階の此の室には庭の植込、椎の上枝、檜の下枝、葉裏をかへして風さらりと吹く。

「どうも郊外はいゝな、ことに春先から夏へかけての雲の色は又別段の味があるな、電車の音は無し、煤煙は立たんし、鳥の聲と風の音と、空の色と水の流れと、何時見ても晴々しいな。」

と、武文は獨語のやうに云つた。

「借問す、柳暗花明の里に淺酌低唱の味と如何です。」

と、三郎は皮肉を云つてちろりと見た、俄かに返事をして赧然として目を外したが思ひ出したやうに洋盃を取り上た、黙つて酌をする弟の顔に何時にないむつかしい色が漂よつてゐた。

「兄さん、多くは言はない、御衷情も御察しする、然し貴下も四十の聲の近い分別盛りの男だ、自重して下さいよ。」

「ウン、然し、吾輩は不貞の妻を見る苦痛に堪えん。」

「見るに堪えなかつたら處分して終ひなさい、酒や藝妓で苦痛を逃れやうとするのは男子の恥です。」

「その處分に就て今日はお前の力を借りやうと思つて來た。」

「本當ですか、兄さん。」

「偽は言はない、名譽とか肩書とか云ふ世間への見榮の爲めに不貞の妻の醜骸を掩うて自から苦しむ程の餘裕は吾輩には無い。」

兄は斯う言つてグツと一息にビールを呻つた。

「少しは御熟考の上の御決心ですか。」

「勿論、今日まで考へに考へぬいた上でお前を煩はさうと云ふのだ。」

「さうですか、ぢや宜しい、如何にも私がカタを付けて終ひませう。」

「一切の方法はお前に任せる、今日明日と急いで呉れとも言はんぢや、頼んだ。」

と、立ち上る、袖にまつはる風の色、お葉が下からビールを持つて來た。

「あら、何方へ……まさか御歸りなさるんぢや無いでせう。」

「はッは、忙しいのでな、又來る道がつけば、何ちよいく來る奴さ、帯でも立て

ないやうにして呉れ。」

「あらお口の悪い。」

「左様なら、お前も出かけて來いよ。」

「あれ、本當にまだよう御座んせう、その内にエミちゃんも御歸りになりませうし阿母様も御歸りでせうしね、悠然なすつてゐらつしやいませう。」

「左様いへば母親は何所へ行つたんだ。」

「向島の御姉様の所へ、何か御用と仰有つてお電話で御座いましたよ。」

「はは。」

と、笑つて三郎を顧みて、

「吾輩の身持の批難だらう、面と向つては言はないで陰で悪口ばかり言つてる、女は始末にえないね、但しお葉は別だよ。」

「こいつあり難い、お葉お前だけは別格山の神社だだよ。」

と、三郎は笑つた。

「又來るせ、ちや三郎頼むよ。」

一度口を切つたら後へは引かぬ、お葉は珍らしく兄が訪ねたのが心嬉しく、何やかやお冬相手に御馳走の用意をしてゐたのと言ひ出して頻りと停めたが、武文は唯その好意を謝しただけで袖を振り切つて辭した、残り惜しさうに玄關へ送つて出ると、卒然としてお葉を顧みて、

「お前は照香と云ふ藝妓を知つてるか。」

「えッ、照ちゃん……」

と、吃驚した目を睜つて兄を打ち仰いで、

「ようく知つてますわ、姉妹のやうにしてみましたから。」

「左様か、中々いゝ妓だよ。」

と、ニヤリ、椎の梢を吹く風に面を打たせて待つてゐた俤に翻然、葉巻の匂を仄かにあとに残して去つた。

四〇 夕立ち空

武文が歸ると三郎は折柄の空腹、残つたビールの栓をぬいて獨酌でやつてゐた。

「ほほ、まあ獨身者ちやあるまいし、呼んだらお酌位してあげますわ。」

と、お葉が花やかな顔を出した、兄が來たので頬のあたり襟足のあたり水白粉をさらりとはいて、人知れぬ身だしなみ苦心の色の穗に出でたり。

「馬鹿に顔を光らせやがつたな。」

「ほほ、ちよつと汗ばんだから顔を洗つたんですよ。」

と、寄り添うて塚を取り上げた、とめきの香りがほんのりと鼻を打つ。

「寄るな、暑くつて堪らん。」

「そんなにお嫌ひなさるもんぢや無くつてよ、是でもお氣に召した時もあるんでしょ。」

「笑はせるせお鶴がゐなくつて幸福だ。」

「ねえ、兄様も御氣の毒ですわね。」

「全くだ、慥う暑くつちや藝妓買も骨が折れやうからなア。」

「あら、その事ぢや無いのよ、種々御家のことがですよ。」

「嫂が悪いからだ。」

「何うにかしてお夫婦の仲もいゝ、エミちゃんとの折合もいゝつてやうになりませんかねえ。」

「駄目だなアまづ、唯嫂の氣がヒガンでるとか思ひちがひしてるとか、それだけの

事なら始末も付かうが、あれは傷物だよ、番茶の出空だよ、麥酒の栓の無いのだし、そして自からの傷物たる事は願みやうとはしないで人の批をばかり打つんだから、まあ〜見込の無いローズ物だね。」

「けれどもローズ物で打つちやつといへば、兄様が御可哀想ですわ。」

「萬事は俺の方寸にある、お前は餘計な心配をしないでせいぐ俺を可愛がつて呉れよ、人事ぢやないせ。」

「暑いから寄るなつてな事を言はれちやア可愛がりたくも手が出ないわ。」

「はッは、いゝ氣なもんだせ。」

「おや母様がお歸りよ。」

と、門前に停つた車の音に耳をよめて、その儘立つて階下へ降りた、仲は二輛、母の外に珍らしく向島の姉がやつて来た。

「へへえ、可笑しな日だなア。」

と、三郎は吐きながら流石に姉の來たのが嬉しからぬでもない、お葉は勿論、自分の爲に足踏みもしない義兄が自から來たのさへあるに優しい言葉をかけて呉れた嬉しい涙に、頼りなき身の袂を絞つた今の今また義姉の來訪を受けて晴々した心の軽やかに迎へたが、男爵夫人藤波峰子は尻目に睨んで挨拶もしなかつた。母親のお濱、とりなし顔に、

「峰や、三郎の嫁ですよ。」

「へえ、三郎さんが何うかしましたかい。」

「嫁がお前に挨拶しやうとしてるぢや無いかね、峰やつたら。」

と、小聲で言つたのを、大きな聲で引きとつて、

「誰の嫁ですよ。」

と、言つた、お葉はたまらず齒を噛んで、茶の間へ逃げこむと、火のない長火鉢の上へ顔を俯せて偲び音のすゝり泣き、とも知らずして二階から降りて來た三郎は、

事の様子が可笑しいと思つたが其所までは氣が付かない、姉は藤波男爵の夫人、その男爵の義妹智恵子が兄武文の妻であつたと思ひ浮べた時に三郎は少しく事の結末を危ぶんだが、さりとて不貞の罪は許すべくもないと漸やくに考へ直した。

「大分いゝ機嫌だね三郎さん。」

と、姉の峰子、挨拶もしないで言つた。

「ウン、今兄さんが來たんで一所に二三本抜いたんだ。」

「兄さんが？」

「へえ、もう少し早く來ればお目に掛れたのに残念でしたわね。」

「兄さんは逢ひたくないさうだ。」

「左様よ、心に歪しい事があるから何時も私達を避けてるんですわ。」

「申戯いひなさんなよ、藝妓買するのが何がやましい、兄さんだつて男だもの、時には浩然の氣を養ふのに何の歪しい所がある。」

と、三郎は少々ムカッ腹で、投げ出すやうな調子で言つた。

「お前さんまた馬鹿に兄さんの肩を持つんだね、だけれども、兄さんも此の頃のよ
うちや仕方がないわ、實は私、それに就てお母様にも御相談申上げたし三郎さんに
も話があつて来たんだがねえ。」

「俺に相談するよりお智恵さんを説いた方がよからう、男の放蕩は婢の梶のとりや
うが悪いからだ、姉さんも氣を付けるがい。」

「まあ、お前さん。」

「尤も兄貴の女房は心棒が曲つてるから眞すぐな楯も取れまいがねえ、俺ん所へ來
るのは商賣ちがひだよ。」

「酔つてるわね、貴弟は。」

「酒は飲んでも飲まいでもさ、俺の云ふ所に間違ひはあるまい。」

「そりや間違ひは無いけれどもね、世間はそれでは通らないわ、兄さんにも地位も
あれば名譽もあり、姉さんだつて相當の身分も教育もある方ですもの、おさまるも

のなら波風なしに今まで通りにしたいわ。」

「兄貴ばかり攻めるのは無理だよ。」

「私の云ふことを終まで訊いて終いなさいつてばさ、そりや兄さんばかり攻めるの
は無理でせうがね、今までだつて何年も平和で来た家庭ぢやありませんか、此の頃
になつて兄さんが不身持を始めたのはやつぱり兄さんの方が悪いと言はなけりやな
らないわ。」

「十何年、平和であつたか無かつたか、現にそこにある母様が證人だ、訊いて御ら
んよ、ことに、兄様が此の頃の放蕩には、そりや言ふに言はれない苦しい事情があ
るんだ、男でなくつちや男の心持は分らない、俺は兄さんに同情する。」

「左様でせうよ、お前さんはるらいよ、藝妓上りの美しい妻君を御持ちだから、
兄さんの放蕩に同情が出来ませうともさ。」

「そんな無茶苦茶なことを言ふ奴があるもんか。」

『どうせ私たちは無茶よ、お前の妻君のように意氣でもなし氣も利かないんだからそりや男の心になつたら藝妓買もしたくなりませうよ、いゝわ、もう頼まないから。』

「俺も頼まれたかア無い、藝妓上りの女を女房にしてる俺にや、男爵夫人や男爵令妹などと云ふ立派な人との交際は出来ないからなあ、但しことわつて置くがね、藝妓上りには七年も八年も男の爲に節を守つてる女もあるよ、男爵何とか令妹が車夫馬丁と私通して知らん顔して貴夫人ぶつてる世の中に、まあ珍らしい事實だね。』

「えッ、口惜しいわ。』

「兄貴にも藝妓上りの女でも娼にさせようかな、母さんも男爵令妹よりは藝妓上りのお葉の方がいゝそうだ。』

「えッ、三郎さん、貴弟は本氣で云つてるんですか。』

「本氣だよ、今兄貴に頼まれたばかりだ。』

智恵子を好てゐない母親は黙して姉と弟の言争ひを訊いてゐたが、別に口出しをしやうともしなかつた、入つたぎり、お葉を尻目に掛けて挨拶しやうとすれば横を向いて目を外して終つたり、誰の嫁ですえと濟し込まれた事のいさゝか腹に答へて茶の室越しにやつぱり物も言はないで見えてゐた。

植込の木立に蟬のかしましき、藪竿を高く掲げた童の群の二人三人、聲のあとを追うて來たのが門の中へばら／＼と影を亂した。

夕立や來るらむ、風一としまり、遠雷鳴の音がをどるをどると響く。

四一 岐阜提灯

岐阜提灯の灯影が、打ち水の濡れ色美しくい庭に流れて、さら／＼風に鳴る青葉の梢に月もほのめく黄昏の涼しさ、奥の四疊半、數奇に拵らへた室の結構、背後の壁を仕切つて丸窓がある、四つ目垣、技折戸で撓らした内庭、飛石が五六枚。

用を訊いてお冬が淑やかに去ると、汗ばんだ額を拭つてお葉とお照はその顔を見合せて揉み出すやうに嫣然した。

「よく入来つて下すつたわね、照ちゃん。」

「本當にね、来よう来ようと思つても多忙しくつて中々出抜けられないんですよ。」

「結構だわ、忙しいのは。」

「結構なのは姐さんよ、みんなお噂さして羨ましがつてゐるわ、本當に結構なお住居ですわ、それに静かでいゝわね。」

「夜なぞ、そりや寂しい位よ。」

「左様でせうね。」

と、美しい水團扇、手に持つたが風を入れやうともしない、黒塗のその柄を弄りながら、

「ちよいと、あの旦那様は。」

「子供を連れてぶらぶらしてゐるんでせう。」

「鶴ちゃんを？ 何故姐さんは御一所しないんですの？」

「妾、照ちゃんが来ると思つたからわざと出なかつたのよ。」

「ほ、よく分つてね。」

「本當はね、是から照ちゃんそこへ行かうかと思つてゐたのよ。」

「おや。」

と、目を睜つて、

「道理で、全然他行の御仕度なのね。」

と、初めて氣がついたやうに、紹お召の單衣に、黒縮緬の羽織をきて、黒地に光琳の波を銀で散らした丸帯、丸鬘のよく似合ふ奥様姿をしみじみ眺めた。

「丁度いゝ都合だつたわ。」

と、嫣然、そこへお冬がアイスクリームを持つて来た。

「召し上れ、解けない内に。」

「有りがと、何か御用だったの？」

「え、種々御願しやうかと思つてね。」

「あたしに、姐さんが、何でせう。」

と、不審の眼を輝やかした。

「照ちやんも全然い、姐さんにおなりなすつたわね、身體の格好からして異ふわ、肩の嬌態なんか、半年前の照香さんとは見えないわ、全く大人びて來たのね。」

「いやだわ、眞面目臭つて其那ことを仰有るんですもの、羞恥が悪い。」

「ほ、兄さまが何するのも是ぢや無理はないわ、あたしも妹のように思つてる

照ちやんではあり、あ、云ふ御兄さまだからならう事ならいついよにさせたいけれ

ども……あ、儘ならない。」

「何をいつてるのよ。」

「照ちやん、いくつ？」

「いやあね、姉さん今日は餘程どうかしてるわよ、變なことばかり仰有つてさ。」

「本當にいくつさ、あたしが辰の九紫で五だから、照ちやんは七赤の午で二十三だつたわね兄さまは、良人と十異ひの三十……」

「姉さんつたら、本當に何を仰有つてるの？」

「照ちやんの星廻りを考へてゐたのさ……良人ばかりヤキ／＼したつて肝じんの照ちやんに其の氣がなけりや仕方がないんだから。」

「何よ、姉さん。」

「照ちやん、此の頃何か心に思ひ當る御客様は無くつて？」

「えッ？ 姉さんどうしてそれを知つてるの。」

と、心持ち顔を赤めて、

「實は、あたしも其の事で姉さんに御相談しやうかと思つて來たんですの。」

『どう云ふ相談?』

『姉さんの方から仰有つて下さいな、私しや氣になるわ。』

『照ちやん、私しや今日ねえ、嬉しいことゝ口惜しいことゝ二つあつたの、嬉しい事を云つて下さつた方にお味方して口惜しい目に逢はせられた人に見せ付けてやらうかと思つて見ましたがね、それぢや母様に申譯がないし、何うしやうかと思つて實は照ちやんの智恵を借りに行かうかしら……と仕度をしてゐた所なの。』

『あたしの智恵なんか駄目よ、私こそ姉さんの智恵を借りやうと思つて來たのに。』と、お照は、お葉の言葉の底を解しかねて、唯當らず觸らぬ返事をした。

『お前さんの相談も大がい分つてる心得ぢやあるけれども……照ちやんの腹一つで私も覺悟をきめるつもりだがね、照ちやん、お前さん此頃爲になる御客が出來だせう、そのお客が誰だか知つてゐて?』

『えゝ? 姉さんそんな事を何うして?』

『赤坂の正木さんつて仰有るんでせう、そのお客様は。』

『まあ、よく御存じ?』

『その方はね、うちの旦那様の御兄様なんですよ。』

『まあ、左様ですかねえ、へえ……姉さん私しや何うしたらいゝんでしょ、私しやそんな事は些とも知らないもんだから、姉さん、恥かしいことに成つちまつたんですわ、私しや心も身體もすつかり任せて終つたんですわ。』

ひつつめに結つた銀杏かへし、水のたれるやうな髪のに、折から灯の入つた電燈の影がゆれて、さらさらと吹く夕風の梢に涼しい音を動して、蠅がかなく〜と鳴く。

『本當? 照ちやん。』

『えゝ。』

と、がつくり首肯いて羞恥しそくに顔を赤めた。

『切れるといつたら何して……もし私が、切れて下さいつてお願ひしたら、照ちやん何うなすつて?』

「姉さん、悲しいことになつちましたわね、初めから御兄様と知つてゐたら、私しやこんな辛い思をしなくも濟んだのでせうに、姉さん、姉さんにも彼方此方にいろんな義理があるんでしょ。」

『それを云ふのはあたしも辛いわ。』

『姉さん——私しやすつぱり諦らめるわ、私のやうな藝妓風情が、いくら御親切に仰有られたからつて、身體を任せたのが生涯のまちがひだつたんですわ、私が身を引いて四方八方丸く治まるんなら、私しや諦らめるわ。』

『……………』

卒然として廊下に人の影、驚いて振りかへつた二人の目の前に、三郎が突立つた。おえふは慌しく立つて座をゆづつた、お葉が引き合せてお照と初對面の挨拶が濟

むと、

『照ちやん、俺の嬢も君の所謂藝妓風情だつたんだせ。』

『えッ?』

『君が兄に身を任せたのも、兄が君を信じてるのも、縁があればこそだ、何も君が身を引いたつてそれで四方八方丸く治まるんぢやないんだ、諦らめられぬと諦らめた方がまあいゝかも知れないよ。』

と、微笑して、

『お葉も一體同情がないよ、早い話が俺との情交を引きさされた時、ちつたあ涙も出たらうのに、我身も顧みないので照ちやんばかり諦らめろ切れるぢや、餘り思ひやりが無過ぎる……と、俺が思ふがどうだい葉ちやん、あの時の心持ちは俺はやけいそで大學を退學して亞米利加へふつとんで終つたせ、お前は川へ投身したくなつたさうぢやア無いか。』

「いやアね、長々と昔話しなんぞ。」

「そいつを照ちやんの昔話にしてやらうぢや無いかと云ふのさ……俺は何にも言はないが兄貴の心持、俺のあの時の苦しみどころぢや無い、もつとく強い切ない苦痛なんだ、十数年信じてゐた妻に裏切られた惱みが照ちやんに依つて幾分でも慰められるなら、俺は兄の希望通りにしたい。」

「それはもう私だつて……ですから照ちやんの心一つで覺悟をきめるツて、初めつから言つてるんだわ。」

「はッは、ぢや是から、そろ／＼その覺悟をきめる都合だつたんだね……だが照ちやん安心してゐる玉へ、俺が萬事は飲み込んでよ、その變り照ちやん君にお願ひがあるんだがね、實は兄貴に目色毛色の變つた娘がひとりあるんだがね。」
と、言葉の終らぬ内に廊下の向ふにバダバダと小さな足音、メリンスの單衣の花やかなお鶴がなつかしさうに膝にすがつた。

「小母ちやん、入來つたの。」

「まあ鶴ちやんなの、少時見ない間に大きくなつたわね。」

「小母ちやん、あたしね、姉ちやんと遊んでゐたのよ、姉ちやん入來いな。」

と、われは顔して手招けば、彼方に、岐阜提灯の灯影をうけて、これはまた浴衣の不思議とよく似合ふエミヤの姿、すらりと立つて此方を見てゐたが、招かれて靜かにその身體を動かした。

四二 葉櫻のかけ

薄墨をばかしたやうに立ちこめた夕もやの上に、仄かに浮き出した月が、五日か六日位の影を見せて遠筑波の峰にかゝつてゐる、隅田堤には涼を追ふ水うちわ、浴衣姿のゆつたりした人の流れが絶えなかつた。

その人々の中に、見すばらしい身装の七つか八つ位の少女が泣きながら歩つてゐる

る。

「オイどうした。」

と、云ふ聲に少女は吃驚して打ち仰いで、まづ自分と同じ位の、花やかに着飾つたお鶴の姿を羨しさうに見た、エミヤとお鶴をつれて百花園へ遊びに来た三郎が、見かねて言葉をかけたのである。

「あの、盗賊にお金とられつちやつて、お米も買へないの、お味噌も買へないの。」

「何、盗賊？」

お鶴にも悲しい経験があつた、おつるは父の顔を仰いで何か言はうとしたが、三郎は静かにとめて、

「いくら盗られた、小父さんが。」

と、五圓紙幣一枚、少女の手に握らせて、

「そのお米の代をやらう。」

「こんなに澤山ゐらない、二十銭なの。」

「……………」

三郎は驚いた、詳しく探ねると二十銭持つて米を一升買つて、残つた釣で味噌を買つて来いと言ひ付けられて出て来ると、不良少年に強奪された者らしいのを、泣き乍ら話してゐたが、ふとその前を通る誰やらの姿を見付けると、

「あれ、あの子だよ盗賊は？」

と、言はれて流石にビクツとして足早になつた一人の少年、お鶴もアツと叫んだ。

「阿父様、鶴ちゃん盗賊もあれよ。」

「何だア。」

と、三郎は又驚かされた、と、つか／＼と駆け寄つて少年の袖を捕えた。

「俟て、君。」

「小父さん、僕盗賊なんかしません。」

と、顔色を變えた。

「誰が盗賊したと云つた……間に落ちず語るに落ち、見れば相當の服装もしてゐるのに、君は兩親はないか。」

「あります。」

「學校へ行つてゐるか。」

「はッ。」

「兩親や學校の先生が盗みしろと教へたか、少女や少年を喝して金を強奪するのは良いことと思ふか。」

「小父さん、勘辨して下さい、僕、もうしません。」

捕えられた腕の痛みに堪えかねたのと、往來の人が垣を作つて立つたのが恥かしくてか、少年はポロポロ涙を流して詫びた。

「しないか……が當になる譯ではないが。」

と、袖を拂つた、と、群集の中から虎鬚の紳士、つかくと入つて来て、

「貴公、吾輩の忤を何をするか。」

「君の御息……ははあ、なる程、いや私はこれでも常識はあるつもりだ、故なくして人の子を捕えて話しはせぬ、家へ歸つたらよく御息にきいて見玉へ。」

「餘計な御世話だ、俺の忤が何か悪いことをしたかときくのだ。」

「見らるゝ通りの體だ。」

「分らん男だな。」

と、たけり立つて、

「貴公、拙者の忤を盗人だと言はれたらしいが證據があるか、あるなら見やう、無かつたらその分では置かないぞ。」

「何の證據呼はりだ、君の良心に問つて見玉へ、君の家庭にとうて見玉へ。」
「エイッ、此の野郎、失敬なッ。」

と、つかみ掛つたのを、身體をひねつて早速の當身、虎髯は二三間先へよろ／＼と飛んだが危ふく足を踏みしめて、

「無禮な奴め。」

と、又も飛びかゝらうとするのを、後ろからとめた男があつた。

「竹田の旦那、相手が悪い、おやめなせえ。」

「なにッ。」

と、振りかへつて、

「六造か、何だ。」

「何だちやねえ、あいつあ志水……お葉の亭主の志水でさあ。」

「えッ？ 志水？」

と、愕然して、やがて群衆にまぎれて狐鼠々々と、夕闇の中へ姿をかくして終つた少年もゐない、盗られた少女もゐない、彼は苦笑しながら、此の夢のやうな一場の

出来ごとを思ひうかべて、エミヤとおつるを促して去らうとした。

と、息せきながら追かけて来たのが三五六の女、さつきの娘を連れてゐる。

「もし旦那様、先程はどうも娘がいろ／＼と御世話様になりました有り難う御座います。」

「何の、その御禮には及ばない。」

「はい、何ですかお米を買へと仰有つて澤山に戴いて参りましたのですが誠に恐れ入りますから是はどうぞ其方へ……。」

「いゝから取つて置き給へ、僅かばかりだ、恐れ入る程の大金ではない。」

「でも御座いませうが。」

「いゝからッて云ふのに。」

と、おつるとエミヤの手を引いて身を翻へして、

「エミヤもお鶴も、早く行かうせ、母ちやんが俵つてるよ。」

「え、だけえどもねえお父様、私、母ちゃんに御園子買つて行く約束したのよ。」
 「なアんだ、早くいへばいゝのに。」

と、また踵をかへして言問の方へぶらりぶらりと行つた。

葉櫻のかけはもうまつ闇に、波の音が、その暗さを通つてとうとうと鳴つてゐた。

「お父様、先刻の髻の人がゐるよ。」

と、おつるの目ざとく、闇に立ち話をしてゐる人の影を見付けて云つた、三郎は静かに首肯ただけで氣にもどめなかつたが、ふと更に相手の六造が疳高な聲を耳にする、ビクリと立ち停つた。

「だから、旦那も一つ手傳つておくんねえ。」

「よし、今晚の十一時だな、大宮の氷川公園の馬場の近所と、その五百圓に間違ひはあるまいね。」

「え、そりやもう 女の方から来いと云ふ知らせがあつたんですから大丈夫ですか。」

「俺も、あれ以来纏つた金をつかまんからなア、山わけはまぢがひないだらうな。」

「へえ、無論でげさあ。」

と、その儘別れたらしい。

三郎は心ひそかにそれと察して、唯去りげなく言問園子の明るい店先に立つた。

四三 氷川公園

中仙道大宮町の氷川公園に、夏の夜は宵ながら更け渡つて祭のあとの寂しき。

夕立が名残りなく過ぎ去つたあとの老木の梢に、涼しい風がさらさらと鳴つて、ばら／＼と露時雨、虫の泣く音が闇の中からりんりと響いて来る、昨日の氷川神社の大祭の賑やかさを偲ぶ由もない果敢なげな繪雪洞の、破れて捨てたその木の骨

に紙がからまつたのを汚なげに投げ出してある社殿の横の方の芝地で、お定まりの若い男と女が何かヒソヒソ話してゐる。

泣いたり笑つたり喋つたり。

「おい／＼、もうい／＼かげんで別れやうせ。」

「だつて、もう逢へるか逢はれないか分らないのに、些とも話して呉れないぢやないの、詰らないわ。」

「話をしたつて、何時まで経つても同じことだ、際限はないよ。」

「あれだ、あんな不實ばかり云つてゐるんだもの、い／＼わ、もう私のことなんかちつども考へやアしないんだね。」

「考へてるさ、考へてるからお別れにも来たんぢや無いか。」

「もう是れツきり逢はれないのかね。」

女のこゑは涙つぽくなつて来た、銀杏がへしの丈長が白い。

「困るなア、大體にしろよ、生命がありや又逢へらあ。」

「またあんな事を、別れたらもうあたしのことなんか思ひ出しもしないんだらうね。」

「忘れやしないよ、俺は。」

「本當、忘れないこと？」

「お前の方で忘れるなつて言ひたいよ、今は何、厭だのかだのつて言ふがね、これが三月か四月も経つて見ねえ、お前の方で俺のことなんか忘れて終はアね。」

「そんな事はないわ、そんな事はないわ。」

「それを恨むんぢやない、俺は……きつともう此の次逢ふ時にや後釜に乗りかえてるから見ねえよ。」

「口惜しいわ、自分で左右だもんだから私まで左様だと思つてゐるんだわ。」

「泣いてもわめいても仕方がないつてことさ、をそくも一年経つて見な。」

「一年経つたらどうするのさ。」

「俺のいつた事が思ひ當るからよ、はッは、お前も早くお嫁に行つて阿母や阿父に安心させた方がいゝせ。」

「あたし、お嫁になんか行かないわ。」

「どうだか。」

「お前と云ふ立派な男があるのに。」

「はッは、だから、俺のことなんか忘れて了ふつてこゝよ。」

「口惜しいわ、妻。」

「ほら見ねえ、ほら見ねえ、もう俺がにくくなつてる、ちや左様なら、あばよ。」

男は浴衣の裾を、團扇でバサ／＼と叩きながら、あとをも見ずにトットと歩き出した。

女も、やがて仕方がないと云つた風に立ち上つて男の後影を見送つてゐたが、そ

の儘そのあとを追うて行つた。

またそのあとから、此度は社殿から入口の鳥居に續く甃を、のこ／＼と歩いてゐる二人、一人は男で一人は勿論女である。男は白い浴衣に鐵絡の羽織を着てゐた女は涼しさうな柄だつたがものは分らない。

「何んだか涼しいわね。」

「夕立がしたからだよ、吃驚させやがる。」

「ほほ。」

と、男にピタリと近寄つた。

「オイオイ、其那に寄るなよ暑くつて堪らないやアね。」

「あついと云ふ程ぢやないわ。」

「然し、外聞もないよ。」

「いゝわ、誰も見ちやゐないんだもの。」

「冗談ぢやないよ、初心な同志の逢曳ぢやあるまいし、オイオイ、そんなに袖にからまつちや歩けやしないよ。」

「構はないわ。」

「絶まるなつてことよ、昨日や今日の情夫ぢやあるまいし、もつと離れて歩けよ。」

「離れたくないわ、一生あなたのおそばに粘付てゐたいわ、私しや何故あなたの根付に生れなかつたらう。」

「巫山氣るない。」

「本當よ、ふざけやしないわ。全くさう思ふんだわ。」

「あゝ、助からねえ、だがね、こいつあ可笑しなもんで始終そばにゐるよりは苦し都合をして一週間に一度位づゝ逢てる方が樂しみなものだせ。」

「樂しみの何のつて、貴方はまだそんな浮いた考へなの、私しやこれでももう家にゐたつて藝妓のつもりぢやなくつてよ。」

「ぢや何のつもりだい。」

「全然あなたの女房のつもりよ、それなのにあなたはまだ其那浮つ調子であるんだから堪らないわね。」

「それや俺だつてお前と夫婦にゐられりや是に越した事はないさ。だがね、儘にならない浮世つてなことを言つてね、儘にならねえ所がちよつとオツなものさ。」

「夫婦の間柄は、お前さんのやうなそんな浮ついた考へのもんぢやないわ、オツだの樂しみのつて、そんな不實なもんではないわ。」

「助からねえな、此度は泣くんか。」

と、言ひながら境内を出ると、庇に結つた髪が少し亂れて、顔の色の物凄程蒼白い婦人が、息を切らしながら登を踏んで來た。

「オイ、何だらう。」

やり過して小聲でいつた。

「逢曳でせう。」

「フフ。」

と、笑つてる聲の下を、商人風に拵らへた男が、物も言はずに通りぬけて行く、先の男と女は顔を見合せてニヤリと笑つたが、思ひ出したやうに手を取つて寄り添うた。

四四 ビストルの音

晝も日の通らぬ夏木立、氷川公園の廣馬場の青葉の闇深く、怪しや白い着物の女の立ちすがた、柳の腰を風がなぶつて髪の亂れもかきあえぬ思ひ惱んだ風情の艶めかしい。

闇に眸を睜つて立つこと少時、地虫の音がハタと停んで、忍び寄る男………の聲。

「奥さんですかえ。」

「六造かい。」

男が四方を憚るらしいのに、女は却つて落ちつきを言葉と身體の態度に見せた。
「へへ、大分御待ちですかね。」

「待つてゐたと云へば待つたかも知れない、待たないと言へば待たないのかも知れない、有り様はお前の考へ次第さ。」

「へえ。」

と、男は氣を飲まれて闇に立ちすくんだ。

「六造、お前も餘程罪の深い男だね。」

「へえ、何か御氣に障りやしたかね。」

「氣にも障らうよ、三百圓、二百圓と二度も無心しといて、此度は又五百圓よこせぢや、私も金の生木を持つてる譯ぢや無し、困つちまふわ、そりや私も昔は若氣の

誤りでどんな徒らをしたか知らないが、得心づくで綺麗に別れてゐたお前が、何故か此の頃になつて昔のことを言ひ立てゝの恐喝沙汰は、ちつと男らしくないと思ふがね。」

「へえ、ちや今晚は出来ねえんですかい。」

「出来ないよ。」

「何だ、出来ねえ、ペラポーメ、大宮くんだりまで引張り出しといて出来ないよつてなチヨポーがあるかい、恚う、誰だと思ふえ、つがもねえ、六造さん知らねえんかい、とまあ言ふ所だが、奥さん、それちや餘りつつ放し方がよすぎますせ。」
「仕方がないやね、名譽と身分のあつた時にや、そりや口留の金も出しもしやうけれども正木の家を離縁になつて、生涯日かげ者の藤波智恵子になつて終つちや、出さうといつても無い袖はふれない道理さ、そんなチヨポーが無かつたら何ともおしよ。」
「へえ、奥さん、本當でげすかい。」

「偽は言はないよ、お前が餘り茂々顔を出すんで良人の弟がすつかり感付いたのさ、それに此の間はお前の知り人だとか云ふ竹田つて辯護士が強請に来てね、みん事良人に突きはねられたが、私もおつつけ追ん出されるのさ、六造、御世話になつたね。」

「へえ。」

と、六造は少し恐ろしくなつて來た。智恵子の調子が一語一語力が籠つて押し付けるやうに男の頭上に聞えた。

「何だね、そんなおどくして、先祖の助六に笑はれるよ、お前も女を恐喝かして生きて行かうつてえ立派な男ぢや無いか、何が恐いんだよ。」

「へえ、だがね、夜ふけのせい何か何だか恚う寒くなつちやつてね。」

「笑はせるよ、ホッホ。」

と、物凄く笑ひ聲が木下闇の奥深く、地びたを這つて消えて行く。

「金が出来なきあ何とかつて物凄いいどし文句が付いてゐたが何うするんだい。」

「六造、私しやお前のやうな意氣地のない男に今迄の名譽も身分も捨てつちまふのかと思ふと、口惜しくつて仕方がないよ。」

「……………」

「意氣地のない男だね、私が正木を離縁したら、一所に駈落しやう位のこととは言つて呉れるかと思つたら、それも出来ないんだね。」

「奥さん、そりや本當でげすかい。」

「誰がよ、今更そんなイクチ無しと誰が生命を取り換えるもんかよ。」

「此奴あ驚いた。」

「それだけぢや驚かし方が足りない、恚してやるから覺悟をおし。」

「アッ。」

と、六造は悲鳴をあげて轉倒した。と、闇に閃めくピストルの銃身、爆然と鳴つて彼の胸を貫通して二言と言はず死んだのを顧みやうともせず立ち去らうとする後背から辯護士竹田大造がぬつと出た。

「おまちなさい、奥さん。」

「えッ。」

と、振り向きざま又も轟然一發、フロックコートの大體が地響して倒れた。途端にどや〜と人の聲、流石にはツとして駈け出した目の前に、

「お母ア様。」

と、文彦が飛び付いた。

「文ちゃん、お前はまあ何だつて恚那所へ来ました。」

「母アさんこそ何だつて恚那所へ来たんだい、こんな夜中に。」

「エイ、黙つといで、母さんは用があるんだからお前はお歸り。」

「お父様も来たよ、叔父さんも来たんだよ。」
「えッ、本當かい。」

「おそかった。」

と、六造と竹田の死骸を、木の間に洩れる星明りにすかし見て、志水三郎は暗然として立つた、そのうしろに武文の手にすがつてエミヤの悄然たる姿が見えると、智恵子は俄かにかつとなつて持ち直した。

「あれッ、母さん。」

と、取り纏つた文彦の胸板を、あなやと三郎と武文が駆け寄る間もなく、爆然となつたピストルの音、闇に火花が散つて、小さい身體が地上に倒れた。

「まあ文彦、お前はまあ。」

と、智恵子は短銃をすてて、我を忘れて文彦の死骸に取り纏つて、熱い涙をポロポロと流して泣いたが、何を思ったか、つかくと、武文の前に進んだ。

「堪忍して下さい、私が悪うござんした。」

「えッ、お智恵ッ。」

と、武文はその手を取つて惹き起して、

「おそかった、おそかった。」

と、その頭髪をかきむしつて地びたを踏んだ。

「遅かつたけれども……詫びずに死ぬよりは幸福です。」

「……………」

「六造を殺したら私の罪に戸が立てられやうかと思つたけれども……その六造の蔭には見もしらぬ人が隠れてゐました。」

「……………」

「エミヤが憎い、憎いエミヤを殺してやつたら胸のほむらが消えやうかと思ひましたが、其手は可愛い文彦を殺して終つたんです、所詮は自分の身にめぐつて来る罪

の報、人を殺せば、私も生きてはゐられないツ、貴郎は末永く……』
と、取り直したピストルを、三郎が慌しく叩き落した。

「……三郎さん、貴郎は私を死なしては下さらないんですか、あなたの一番に
私を一思に死なしては下さらないんですか、もつと此の世に永らへさせて生きな
がらの苦しみをさせる御つもりなんですか。」

「そんな心得なら、何もわざわざ茲まで姐さんのあとを追つて来やしない、丸く、
無事におさめやうと思へばこそ兄や文ちゃんを連れて来ました……一足僕が早か
つたら此那ことにはさせなかつたのに、種々と胸に描いた計畫もあつたが……」
「それを今更私に言つてきかせる程、貴郎も冷酷では御座いますまい、唯此の儘死
なせて下さいまし。」

「いい覺悟だ。」

と、暗涙を呑んだ、又しても短銃を手にした時に、エミヤが、

「母様、お待ち下さい。」

「えッ、何をとめるの？ 私を人殺したから、生きてはゐられないんだよ。」

「私をかはりに死なして下さい、私が此の人達を殺したも同然ですもの、私さへ来
なかつたら恚那悲しいことにはならなかつたんですもの、阿母様のかはりに私を……
…私がそのピストルを御かり申します。」

「エミヤちゃん。」

と、智恵子はハラハラと涙をこぼして。

「お前はまあ、可愛いことをいひますわね、本當に、何故私にお前の可愛いのが
分らなかつたらう、お前にはずい分辛く當つた、堪忍しとくれよ、みんな阿母さん
が悪いんだからね。」

「阿母さま。」

「エミちゃん、お前が死んだらそれこそ阿父様を誰が慰めてあげます、お前には阿

父様のことを頼みますよ、三郎さん……阿母様にも葉ちゃんにもよろしく言つて下さいよ。」

と、言つて、其の短銃を咽喉に疑した時に竹田の死骸がむくくと動いた。

四五 蟲の唄

「奥さん、御待ちなさい。」

と、起き上つた、彼は短銃に打たれて、一時は氣を失つて倒れてゐたが、時を経て蘇生したのである。

留めた心は善か悪か、思ひもよらぬ邪魔物が入つたと、三郎は眉を潜めてちつと竹田の顔を見た、星あかり、木の間を通して人の顔がおぼろげに見える、竹田はその虎髭を撫でたが力なく坐つて、

「此所は一切吾輩が引き上げた、君らはまづ引きとり玉へ。」

「左右は不可よ。」

と、三郎は強く頭首を振つた。

「行つても行かなくつても左右した方がいゝぢやないか、奥さんが茲で自殺したつてそれで奥さんの罪が消える譯ではない、それで社會は奥さん一人を下手人で置きはしない、誰が想像したつて正木君、君が今夜の殺人犯人——とまあ吾輩も商賣柄そう斷定するの理由を持つてる。」

「……………」

「所でよし又心にやましい所がないから恥づる所はないつて云ふが、法律は腹ん中までは洞察しない、目前の證據で人の罪惡を決めて終ふ、だから此所はおとなしく吾輩の言葉に従つて歸り給へ、吾輩は今奥さんに打れた傷でとても長くは持つまい永い間悪い事をして來た罪の罰とおもへば當然だ。」

「けれども、私は生きてゐても歩くべき道はありません。」

「死んでも行く道はありません。」
「えッ。」

「志水くん、此の場は吾輩に任せ玉へ、その變り吾輩は伴の一身を、改めて君の御教育に任せたい、吾輩一期の願だ、家内には獨立して生活出来るだけの家産があるが、彼奴の手許にをいたんぢや、伴の最後は六造にも如かないだらう。君、頼みます。」

と、近寄つて手を握る息は忙しかつた、三郎は物も言はずにハラ／＼と涙をこぼした。

「よし、ぢや君、此所は君に御願しやう、君の御子息の一身は私がきつと引きうけて、君の名を恥かしめないようにしやう。」

と、握りかへした手に力を籠めた。

「どうか願ひますよ。」

と、立つてゐる力もなく、どつかと座つて、

「君の奥さんは、川村さんの令嬢だよ、萬事は芝吉が知つてる、あれも吾輩がふとした心得ちがひから、三つの時に誘拐した。」

「おぼろげながら知つてはゐた。」

「親が子を思ふ心の切なさは、志木君、誰も同じだ。今にして初めて自分の恐ろしさに泣く。」

「分つた、安心し玉へ、御子息はきつと私が御世話します、親の心は、仰有る通り誰も同じだ。」

「頼みます、ぢや一時も早く引き上げ玉へ………」

と、あとは消えて、竹田は地上に突伏した。

「あッ。」

と、駆け寄る人々の、人様々の物思ひ、武文と三郎は竹田に、エミヤと智恵子は

文彦に絶つて唯ため息を吐くばかりだったが、然し、六造の死骸ばかりは寂しかった。

寝ぼけた鳥の、物に驚いたらしい消魂しい羽叩き、ばらばら露しぐれが散つて、寂しい公園の夜の闇を、何所からともなく地虫の聲が途絶え途絶えに響いて来た。

* * * * *

武文の一行が東京へ歸つたのはその翌日であつた。

竹田は六造と文彦の下手人として、自首して出たがその夜の内に絶命して終つたその子の二人は三郎が引きとつたのは言ふ迄も無い。

お葉とお妙は肺病の名乗合をして、不思議な縁を語り草、夏の夜の涼しさが身にしみて嬉しかった、お妙の戀は、お葉、必ず叶えてやると力んでゐる、根本哲士が、是も不思議に志水三郎と高等學校時代の友人だつたことが分ると、お葉は、自

分と夫との戀の嬉しい結果になつたにつけて、お妙もそうしてやりたい、貴方から根本さんに話してくれと頻りとせがんだので、近々三郎から根本の心をたしかめることになつてゐる。

根本の新劇協會はいよく成立した、彼はその奔走で此の頃は小説も書いてる閑がないと云つてゐるが、それでもよく志水の所へ訪ねて来た、不思議と話があつて、志水もその劇團の興行主任としてやつて見てもいゝなどと云つてゐる。

武文はお照を落籍して家へ入れた、エミヤは若いやさしい母と仲がよかつた。

智恵子ばかり日かげの花、何所にどうしてゐるのか行方は分らなかつた、尼になつて諸國をめぐつてゐるとも言ふ。

根本は、

「俺の芝居のたておやまつてなみキだが、惜しいなア。」と、嘆じた。

四六 紅い雲

「綺麗だわね。」

「本個にね。」

「宛然錦を張つたやうだわ。」

「でも、以前から見ると随分少なつたんだ、川だつてまるで變つてる。」

「でせうね、ですけど、綺麗だわ、御覧なさいまあ、この夕陽のバツとさして居るところなど、云へないわ真箇。」

「それやそうだネ。」

瀧の川の紅葉林を、手を取り乍ら徐歩して居るのは志水とお葉の兩人である。事件落着すると、兩人は道灌山の邊りに別宅を借て住み、疲れた心と體とを清らかな高臺の風に浸してゐた。今日は日柄が好いので紅葉など見て來やうかと、折

から來てあつたお妙を連れて三人が、急ぐでもなくブラ／＼瀧の川へ來たのであつたが、途中でお妙は忘れ物をしたからと戻つて行つたのである。

「妙ちゃんは何うしたんだろ。」

「まつたくネ。」

「忘れものをしたんだなんて……」

「うれしさうだつたから、何か見せびらかさうと云ふ腹かも知れないわ。」

「罪のない女だネ。」

「本當にネ。」

「一緒にさしてやりたいネ。」

「大丈夫よ、もう好い加減出來てるんですもの。」

「もう好い加減出來てるんだつて。」

志水は好奇の目を張つた。

「えい。」

「油断がならないわ。」

「でもあなた、妾が附いてるんですからネ、ほんほん。」

「何だい、お前が橋渡しをしてやつたのかい。」

「橋渡しと云ふ譯では有りませんが、物の順序がさう云ふふうになつたんですわ。」

「恐しいやかましいことを云ひ出す女だぞ、ほんほん、何せそれや結構なことだ根本君と云ふ男は、快活なやうで心の底に悲しみを持つてる男性だから、お妙ちやんのやうなあゝいう優しい女性でも得たら、幾らか氣が開くだらうと思ふ、兎に角しつかりやつて呉れ。」

「えい、屹度妾お引き受けしてよ。」

「噂をすれば影だ、お妙ちやんが来た。」

「あら。」

紅葉茂みの木の間をば、白い日傘を斜にさして、急いで馳けて来たのはお妙である。

「お待ちせ申しましたわね。」

ニツコリ笑つて、顔へかゝる後れ毛を拂ひのける。

「いゝえ。」

見迎へたお葉は床几の端をすゝめた。

「何を忘れて来たんです。」

「お宅の井戸端へネ手提を置いて参つたんですの。」

「手提げ……金庫と来ると少し勿體もあるが、オペラ袋と来ちや墓の踏み潰された形によく似て居りますネ、はんはん。」

志水は、茶屋の婆が汲んで出した番茶をすゝり乍ら輕口を云ふ。

「まあ。」

「随分だわね。」

「甚太くつてよ。」

女兩人は顔を合はせて、それから鳥渡志水を白眼めつける。

「お、怖、マヒマヒツプロ鎗出せ角出せかい、これや好い見せものだ。」

「まあ……………」

「いやあだ。」

「それはさうと、お妙ちゃんそんなに大事にしてるところを見るとその袋の中にか大切なものが這入つてると見えますネ。」

「え、え。」

「何か知らないが、私に見せませんか。」

「イヤ……………」

そういふお妙の顔がポーツとした。

「紅葉見に来て顔赤くしてと云ふやつ、いよく以て穩かでないね。」

「だつて妾……………」

「困つて？」

面白がつてお葉まで擲揶初める。

「え、困るわ。」

「あの人からお便りがあつたんでせう、そんなら妾たちに見せて下さつても好いぢやありませんか、ネあなた。」

「真箇だ、何をして居るか知りたんですからさ、都合によつちや僕だつて斯うしちや居られないんだから、ネお妙ちゃん、勿體ぶらないでお見せなさいよ。」

「い、え、お手紙は家へ置いて参りましたの。」
と、かすかに云ふ。

「家へ置いて来ましたつて。」

「え〜。」

「あんなことを云つて隠すんだわ、お意地よお妙ちゃんは。」

「だつて本當よ。」

「なら、そうやつて、手提げを大事がらなくつても好いちやなくつて、そこにあるから爾う大事にするんだわ。」

「あら、あんな事を……。」

お妙は困つてモヂ〜してゐると、密然うしろへ廻つた志水隙を狙つて手提げを奪ひ、川向ふの方へドン〜逃げ行く。

「あら……いやよ志水さん……。」

「はい〜。」

志水は逃げながら手提げの口を開け何やら手早く懐中へ仕舞ひ込んで、追掛けて

来たお妙へ手提げを返した。

「随分だわ。」

お妙は恐しく呼吸をはづませてゐる。」

「恐縮、恐縮。」

元の床几へ戻つて來ると、志水はお葉に向つて、

「おい、根本君は可愛い人だネ。」

と、云つた、

「あら……。」

お妙が周章て、手提げを開けて検る、そのとき志水は懐から一葉の寫眞をお葉へ渡した。

「あら。」

「いやよ鳥渡。」

お妙の顔は紅葉より赤く上氣した。
寫眞の裏にお妙の手蹟で可愛い人と書いてあつた。
斯うして世の中が泰平になつた。

あてあ 姿畢

大正五年九月十九日印刷
大正五年九月二十八日發行

〔定價金五拾錢〕
〔郵稅六錢〕

不許複製
小説
あてあ

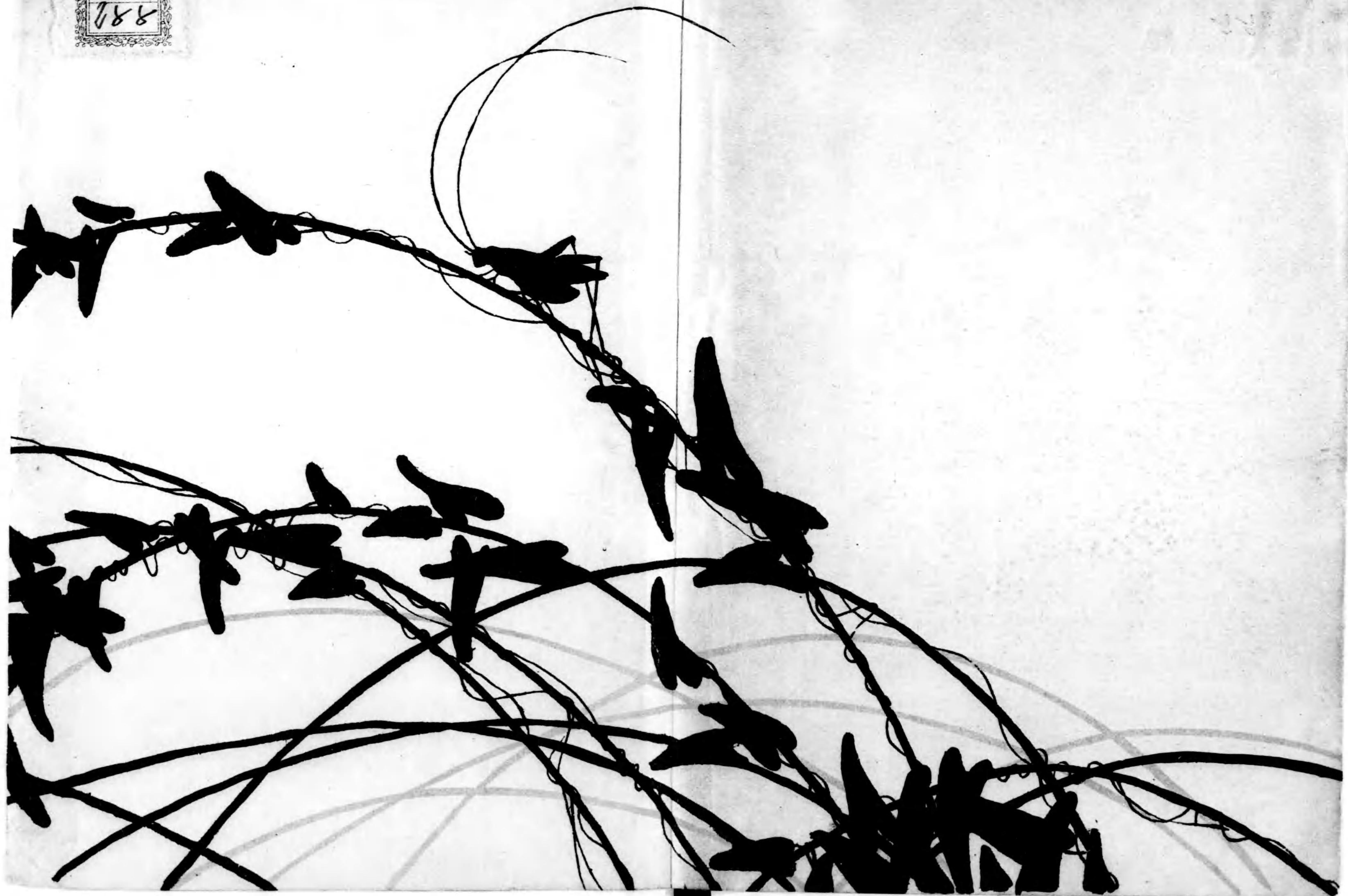
著者 豊秋生
東京市淺草區瓦町二十四番地
發行者 中村惣次郎
東京市淺草區小島町七十三番地
印刷者 田中龜市

發兌元

東京市淺草區瓦町二十四番地
中村日吉堂

電話下谷四九三番
振替東京一一六一六番

882
893



終

